

繪本太功記序

文辭の妙行、文之奇を賞するに、只、又艷麗なるのみならず、能く人情を穿ち感入らしむるを以て、尤も優れりとなす。正史紀傳世より出る者無數、傑作偉筆なきよしも有すと雖も、正史紀傳ハ事物の外貌のみ、能く情性を覺發し、精粗妍媸を辨ずる者ハ、野乘稗史又如くものなし、就中雅俗を通曉して、愛觀を得、尤も精しく、人情を穿ちたるハ、院本を以て太斗となす、往時近松翁、筆を此道よりし以來、名聲を後世より傳へ、竹田、田出雲、三好松洛氏次で聲價を博す。其事荒唐脚色演戯より、雖も空中より此の大櫻閣を書き得たるの健筆ハ、作者諸氏が多年拮据の効を著へす、足れり、實又人情の表裏を観ひ、風俗の微妙を知らんと欲せば、此書を捨て而して將た何

くと問はんや頃日内藤氏之が名作三十六番を撰び順次之
を刷出せんとす先づ第一着として繪本太功記の巻成る來
りて序を求む余大いよ其時好々適するを贊し聊か贅言を
記して以て巻端を埋むと爾云

梅花笑を含んで南窓よ垂る頃

開花園主人志る

繪本太功記

○發端

作者 近松 湖や水なぎ
葉軒

天よかなひしゆへやらん八百の諸侯從ひて紂王を討んといひしを我未だ天命をしらずとて諸の軍を引き具し先かへりぬ實戰國よ大勇をしめす亂舞の音たかき内大臣春長公の一ど構へ遠近の諸士大半屬し登城ハ櫓の歯を引くごとくさも嚴重み見へよけり取次の侍罷出仰付られし安部の法印只今參着仕るとア上ぐれば近習の面々斯と取次ぐ間もなく内大臣平の春長從ふ武士ハ羽翼の臣眞柴筑前守久吉武智光秀諸共よ様際近く座み直る久吉下部又打向ひ、君よもことのふお侍かね早く案内せよと、いふ問程なく法印安部氏遠都の水清くよどまぬ公家の交り又衣紋正しく入来る春長莞爾と打笑給ひ、法印にハ大儀く、其方を召し寄せし餘の儀よあらずあれ成大庭の蘇鉄泉州妙

國寺又有しを、此安土に植置く所より頻りと聲を發し妙國寺へ歸らん、歸せくと震動する事三夜又及ぶ、正しく變化の所爲ならん、判談いかよと有ければ、始終を聞入る内よりも理を考ゆる道の胸の筈木又眉をしひめ、尤成るに尋某考ゆせしと草木心なしといゆせ共佛地又育朝夕妙經を聞込み、一度枯し木なれども、元の如くさかへしも法花經の徳ならずや、法力の尊きに宗旨の有がたき所なれば君もに満足ならん、急ぎ佛地へ送りかへしたまひるが肝要ならんと法印が水を流せる辨舌の實晴明の末孫の器量顯られ見へよける、血氣の大將道理又せまり、春長が手又入れし蘇鉄返すべきいれなし暫らく妙國寺へ預ける旨使者を以てナ遣し身が心又叶ひざろ法花の族いれざる宗論を好み、上を恐れざる無禮の段、牢獄へ押込置たり、其上今日捕へ置たる普天一人身が目通りへ引出せよ、安部氏又休足有て然るべからん、久

吉よひ鹿略なき様もてなすべしはつと領掌式禮目禮、眞柴又隨ひ法印
は次の一問へ立て行程もあらせず下部共普天坊を高手小手庭上に引
すゆれば光秀の普天より向ひ、貴僧かしる警しめよわふ事も法義故と
は云いながら獄の苦しみ察しやる君よも是よに座ましませばしさつ
て出牢の御願ひナ致されてよからんと普天をかべふ明智が詞尾田殿
くわつと怒の面ナ某が詞も出さぬ内出牢の願ひせよとはいらざる汝
がひいきの沙汰扣へて居よと居丈高、ねぐさり坊主よつく聞け、此度
妙國寺の庭木の蘇鉄某所望し此安士又植置きたる所むせうよ妙國寺
へ歸らんとほゆる餘りかしましきよつて暫らく彼地又預ける間、佛
木たり共春長所望の上は再び返すよあらず汝らを番人又ヤ付る間、其
旨懸度心得られよと冥途の高祖へヤ達せよ不承知ならバ直様又普天
を以て冥途返答有ベし、儕も法花の妙をしらば二度此土へ立歸り、某

又詞をかはせよ、最早左様なる法力は有まい。一時も早く使を急がせよ、早くくと不敵の春長、重惡つのる權威の仰こらへくし普天坊すつと寄て歯がみをなし、汝かしたり嘲つたり、汝が宗門で有ながら高祖をからじ奉り、惡口雜言報ひ忽遠かるまじ。愚僧只今命を滅するも汝が使よ行よあらず焰魔の廳へ趣齋が惡逆訴人の爲よ此世を去る、見よく頓て火の車を持せ、拙者迎ひよ来るべし。一時も早く冥途の門出急ぎたし。光秀殿介錯と、置る普天を光秀がはつたとよらみ。我君よ詞をかへし、惡言を吐手間でなせ。助命の願ひ致さぬ、恐ながら我君よも御怒りをしづめられ、御助命の程偏よ願ひ奉る。元來勇猛盛んにして、良もすれば靈場佛地を破却したまふ事、君の一失山門の衆徒等も、急難を遁れんと一七日の加持祈禱、惡逆の勇將と世の人口黙止がたし。只仁惠の御計らひ偏へよ願ひ奉つると、事を分けたる光秀が、詞よ春長突

立上りだまれ光秀、我惡逆とい憎き過言歎されづと拳振上明智が頭り
うくく打すへたまへど手向ひの、ならぬも主命ハッはつと誤より入た
る無念の涙普天猶も怒りの顔色、エ悪鬼魔王と云ひ汝が事、君有て臣、臣
有つて君たる事を知らず、情なくも大國の、主たる光秀殿を、童おどりよ
うち打擲天罰佛罰一時さか報ひ墮獄だくだしきれんすと、怒り重ぬる額ひだ
の天弓、光々として日運の、出現有りと、身もよだつ、よく物ないせそ早
くも國境きやうへ引立よと、下知恐れ家來共、はつと斗たたかひ引繩ひきあの、頗て恨をし
らさんと題目ひめいの聲一心ひとこころ、佛敵春長歎さじと詞わざひ正ただみ本能寺、御法ごのりの庭
の露つゆとなす、佛の報さがひ宗門の威力の程こそ

○六月崩日の段

扱も其後天正十年六月上旬の事かとよ、内大臣平の春長、東北ひがし北きた猛威もうゐを
ふるひ押おて都みやこ上洛有る。嫡男城之助春忠二條の御所きよ居すをしめ給

ひ天奏御沓を入給へば饗應の役人の武智日向守光秀、森の蘭丸初めと
 し、譜代の良臣古老の諸士列を正して相詰る院の所の内勅浪花中納
 言兼冬仰出さるゝれ徃昔應仁の亂れより、諸國の逆賊王威を輕んじ、都
 の内へ軍馬を引入玉座近く馬蹄々穢し獻慮穩ならざりしよ、幸春長大
 志をいだき帝都を無事々治むる條、主上獻感淺からず、其功を賞し給ひ
 嫄子城之助春忠を從三位叙し左中將々任せらる院の内勅、斯の通り
 と有ければ、春長はつと平伏有々有がたき勅命不肖の某、なんぞ一臂の
 力々及べん、三好を初め逆徒原四方々退散いたせしも君の聖德數なら
 ぬ粉春忠身々餘つたる官位昇進天恩謝するゝ詞なしと、勅答有れば兼
 冬卿、やゝ満足の氣色、春長重ねて軍務々暇なき某、心斗の饗應鄙び
 たる觀世能は上覽も時の興、奥殿へと有ければ袖かき合せ兼冬卿、武
 智が案内よしづく、と奥の間さして入給ふ、春長跡を見送つて、蘭丸是

人と近く召れ汝も兼て知る通り無二の忠士と思ひの外心得がたき光秀が心中彼が心を探らん爲いつぞや寺よりおるて諸侯の見る前恥辱をあたへ恥しむれど面に怒りを顯へさず無念を忍ぶ彼が胸中猶以て不審の一つ其儘まさし置べ虎の子を飼ふ同じ逆心の企有や虚實を探りためし見よと仰み蘭丸さんい武智が行跡聊不審存る折から割符を合す君の御心思ひ合する彼が俗性頭上より喜怒骨有者ハ主人よたゞると異人の禁めもし逆心又極まらば討て捨んより手間隙入らず奥へ踏込引どらへき鹿忽也蘭丸實否も糺さずあら立なば返つてひが事出來せん事によそへてナ合點かゝり奉る必油斷いたすなど示し合して春長公帳臺深く入給ふ蘭丸ハ只一人兩手をくんで思案顔工夫をこらす折も折奥は亂舞の打囃子二番三番ワキ能も終りと見へて配膳の時刻も移る已の上刻武智が一子重次郎古實を守る饗應司配膳のかけ盤山海

の珍味^{ちんみ}美^びをつくし、目八分^{まつぶ}と捧^{ささ}げ来る、蘭丸見るより重^{じゅう}次郎先待れよ。
饗應^{こうぎょう}の役目は、お手前の親父、光秀殿と此蘭丸、兩人立合^{たてあ}せも有べき
を、自分一人の取計^{とりけい}らひ、此蘭丸は呑^の込^のぬ、膳部の次第^{じで}、いかゞでござる
、此料理は板元奉行中井半左衛門七五三の献立^{けんりつ}、七五三、ハチミツ、何^{なに}も
せよ、相役の某^の一應のこたへもなく、氣儘成^{きまつ}いたし方^{かた}、近頃以^て不^{しづか}羨^{しづか}千
万、此分では差置れず、光秀殿へ直應對^{ただおうたい}、役所へとかけ行向^{ゆきむか}、襖^{ふすま}ぐら
りと出来る武智、蘭丸傍^{わき}へぐつと詰寄^{詰めよ}、様子^{ようしょ}残らず、聞れしな、武士は禮義
を表^{あらわ}とする、此蘭丸を踏付^ふし仕方^{かた}、いか成趣意^{じゅゆ}か言^いへ聞ん、返答^{へんとう}次第手
へ見せぬときつぱ廻せば、仰々しや蘭丸^{らんまる}遠若氣^{とおなが}の一徹^{いつてつ}、何故貴殿を
侮^{わざ}りやさん、最早^{もはや}膳^{ぜん}の時刻故^{ゆゑ}、役目大事と勤る光秀、だまり召れ、饗應^{こうぎょう}の
役、貴殿拙者^{ごくわん}よ相勸^{すすめ}よと、主人の云付、主命をもどき、自分の氣儘^{きまつ}とせら
るゝは、聞へた、こりや何か拙者^{ごくわん}を役^{くわく}と思し召か、但し又智惠者

と呼れし武智殿人を見下す高慢か。ヤ人か人も知たる其元の素性、何か渾人かのよるべなく、所か方かをうろたへ廻り、北國かふゐて詮方かなく、糧か盡たる身のせつなさ、土民かもの小憐かを集め、手跡指南の禮物で命かをつなぐ寺子やのかお師匠様か、まだ有か。日外か江州佐々木征伐かの折から、此下かと先手かを争ひ、箕作か和田山時限の合戦、久吉かは仕負かても、耻かを耻か共思かぬ其元、何かと、そのふでかいござらぬかと心かよ思かぬ傍若無人か、さしもの光秀かへとせき上か。物かよ狂かふか蘭丸か、太切かの場所かと事をか慎かみ、云かせて置けかい法外千万、今一言云かつて見かよ、舌かの根かを切か下かんか、ならば手柄かよ切かて見かよ、切かて見せかふ、かと兩方かが互かよ語寄か誼かより、既かよ斯かよと見かへたる所か襖かあらか、かよ春長飛かかかつて光秀かが、衿かがみかつかんかでどうと捻付か、やかれ光秀か凡武家の格式か、古實かを以かて式法かを用かる、過かたるか猶及かばざるかよしかじかと、古人の詞院かの内使かも重かけれど、皆それかの例法かあり、中納言殿饗應か

の膳部金銀の瓶器を用ひ、七寶を芥のごとくちりばめ、法外奔走。此後、主上仙洞の行幸より、何を以てか饗應よ叶へんや、其上蘭丸がナハ我詞も同然なるよ、異變致す慮外者頗ぶて蘭丸、ハ早くふて、ハシテ上意なりと蘭丸が腰の鉄扇振上て、眉間真向續打、くい入要よ血ハ瀧津瀬、是ハとかけ寄重次郎膝よかためて引敷光秀流るゝ血沙諸共よ眼血走る、無念の顔色春長、つくト打守り、いかよ光秀、今蘭丸が手を以て春長が折檻、口惜ふハ思ひぬかと、底意を探る大將の、詞よ光秀居直つて、ハ仰共覺へず數ならぬ共武智光秀、君よ捧げし我命、骨ハひしがれ身ハすだく、又成逆も、大恩有ヒ主人をお恨ヤさん様ハなし、左ハ去ながら世の人口、春長こそ鬼の再來、情をしらぬ大將と、譏りを残したまん事、末代迄の家の瑕瑾舊惡を憎むヒ生質、諸士の恨ハ小車のついよヒ身よ報ふといふ、ほ心の付ざるは、淺ましや悲しやなア心をひるがへされ遠仁義の大將

と、呼れ給はれ我君と、或は怒り、或は歎き、五臟をしほる、血の涙、思ひに千
よ重次郎父の心を察しやう、齒をくいしばる忍び泣心ぞ思ひやられ
たり、金言耳よ逆立つ大將、猶も怒りの聲あらしか、さいはれぬ諫言、推參
至極、目通り叶へぬ立てうせう、シく蘭丸、武智光秀親子の者、門外へ引出
させ、早くハと烈しき下知、はつと領掌、蘭丸が猶豫ヤハシヨいかみときめ付
られ、無念重なる光秀が、我子を引立出て行、底意は誰かしら涙の萬里よ
羽打つ大鵬や、面目涙重次郎身はしよげ鳥の片羽がい、父の心はしらよ
ぎて、神も佛もなき世かと、身をかこちたる忍び音の、胸へくら闇五月や
み證方涙諸共よ御門の外へと出て行、名よしおふ花の都を隣して、時よ
近江の本城を跡よ見なして今爰よ假の舍りの上屋敷千本通りよ一擣
へ、日向守光秀が、出仕の留主キミ主の方、夫子の武運長久を、神よ祈ヒツギをかけ
まくも、手づから備ふる神酒供物、殊勝よつしやうよ見へて爪はづれ、遠は武家の奥

床し折から次の襖を開き出来る武士の武士武智が組下九野豊後守年
も五十の分別盛り操が前より兩手を突き先以て今日は林鐘の初日大内
よりも永室の節會殊更太守光秀公大公義麿應司の大役仰付られ御
家の眉目我より迄大慶至極と述ければ操の方取敢あへず夫光秀重次郎
諸共未明よりの御登城殊々大事なけふのお役目常より短氣の春長様生れ
付いた夫の一徹何の障りもない様と案じるゝ女の常悲しい時の神佛
と手づからのお備へ物是れゝともふ万事抜目なき光秀公追つ付け
吉左右上首尾と挨拶取となる所へ殿様の御下城としらせの聲よ妻操
我子の乙壽諸共豊後守も座を改め侍間程なく武智日向守光秀常よ
かはりし其面色疊ぎはりも荒らしく不興の体よ立歸れば跡よ隨ひ
重次郎しほくとして座よ直る夫の顔色額の疵心ならずと操の方半
秀の傍近くや我夫いつまないお顔持お氣もじ悪ふはござりませぬ

お怪我でもなされたか、どうやら氣がしり胸騒ぎ、心がしりと尋ねれど
とかふいらへもせぬ夫重次郎顔ふり上（詞）。今日二條の館みて饗應司を勧
むる所、日頃不和なる森の蘭丸、我（口）へ様（口）の悪口雜言。それのみならず
春長様、以ての外の御怒りよて、蘭丸よ仰付られ、アの通り、父上の眉間
へ疵の付程よ、殿中でのうち打擲目通りへは叶はぬと、警固の武士よ追
立られ、無念ながらもおめくと、顔押し拭ひ歸りしと、云く。こぼす口
惜涙、聞く妻（口）はつと、胸をつらぬく釘（口）。豊後も俱え拳を握り咬牙齒
ぎしみ無念の涙様子立聞四方天、ものをも云ず表の方、かけ出す裾をし
つかと留（詞）事をせいたる汝が顏色、子細ぞあらんといはせも立ず（口）。愚な
り豊後守主人へ耻辱をあたへし素丁稚の蘭丸め素頭引抜立歸る妨げ
するなどふりほどき行んどするを猶も引き留（詞）。其憤りは鹿忽（口）、汝が
不骨は主人の誤り返つてお家の仇とならん、先つ待たれよとさしゆる

九野、^ヤ面倒など勇氣の田島放せ放さぬ二人が争ひ、光秀聲かけ^{シテ}待て
兩人、^身が詞も出さぬ内立騒いで見ぐるしいしづまれやつとせいすれ
ば、物^{アメ}こらへぬ田島の頭、武智が前ふぐつと誂かけ、縱誤り有る^{アメ}もせ
よ、舟州近江兩國の太守殿中ての打擲い、我とも俱^シ耻辱、頬耻をさらは
んより、蘭丸めを打て捨叶はぬ時の生害^{シキガハ}と覺悟極めし四方天、^マなせお
留なざる^シな、^ヤ愚く、光秀を打たる^ハ私ならぬ主命^{スリヤ}、蘭丸^ム遺恨^ルハ
ない、元來短慮の御大將、心^ム叶へ^ハ飽迄寵愛、又叶はねりうち打擲、縱命
を召さる^シ共、君^ム捧げし我一命、ちつ共惜ま^シいどりぬ某、我存念もし
らすして息筋はつて尾籠^{ビラボ}のふる舞、しづまれすされとねめ付る、道理^ム
邊荒者^{ミナガ}が、行も行かれず立たり居たり勇氣も、たゆみ猶豫^{ナメラ}ム内、御上使の
御入^シと下部が聲、光秀不審の眉^{アメ}を皺め^{ハシ}、^{アメ}心得ず思ひがけなき上使との
何よもせよ、女房船は次へ立早く^シと追立やり、威儀^{カタチ}繕ふて出迎ふ案

内よつれてのつさく、役目を功み肩肘はり、頬も眞赤、赤山與三兵衛上
座よ、むんすと押直り、上意の趣餘の義よ有す、先達て眞柴久吉、郡三家を
退治の爲中國へ馳向ふ、急ぎ光秀加勢として、西國へ下り久吉の幕下よ
屬し、戰功を勵むべし、其功勞よよつて、出雲石見の兩國給ひるべき間、今
迄下し給はる丹州近江二ヶ國の召上らるゝ旨、城代へや渡し急ぎ城を
明渡すべしとの嚴命也といふよ人よ二度恊り、主從顔を見合せて暫し
詞も口籠る物よ動せぬ光秀は禮義正しく上使よ向ひ、^御台命の趣委細
承知仕る直様是よ西國下向、城明け渡しの用意万端、家中の諸士へもや
渡さん、早速の領掌神妙く、一刻の延引ハ一刻の不忠となる、出陣や
ら宿がへやらがらくた道具片付て、早く城を渡し召れ、役目ハ是迄ふ
さらべど、よくてい目禮取ませて、眞綿よ針の青疊、蹴立てこそは立歸る
一徹短氣の田鷹の頭、^御主人、今亦山が上意の次第、前後揃はぬ詞の端

ぐ、西國加勢と披露して、實は御身を改易し、自滅をさせんす春長が姦
計良禽は木を見て樋、不仁非道の尾田春長、義理も忠義も是限り、西伯姫
昌は般を討ち、つゝ天下を治めし例、破鏡再び照さぬ道理、今目前と顯
はれたり、今隨臣の空虚をかんがへ、一時又尾田を討亡し、天下又覇たる
功を上、名を千歳と、いめんに、いかみくとせき立田嶋、やし默然
たる日向守、始終こなたと立聞操、襖あらはと走り出、夫の傍へさし寄て
忠義一途の田島の頭、さらく無理とは思ひねど、勿躰ない我君を殺し
て四海を奪ふとは聞もうるさい穢らはしい罪は目前美濃尾張主を殺
して一日も安穩ならぬ天の責む年寄れし母御様、いとし可愛子供迄俱
々悪名とらするが、それが本意か情ない妻子不便と思すなら、御身全ふ
月ど日のぐもらぬ鏡武士の、操を立て給はれど、わづしくといつ理をせ
めて夫を思ふ貞心の思ひは千筋百筋の亭絶を亂す憂涙、と、いめかねて

ぞ見へよける。元來仁義の豊後守、光秀より打向ひ、文武二道の我君よりお諫めや。憚りなれ共、和漢の書籍より記せし通り反逆謀反の輩が本意を達せし例になら、世より秀たる光秀公高木風の俗語よりひとしく皆僕人のなす所、時節を待て誤りなきや開きの手段にさまぐ、上使より立し赤山と君が五音を考ふるより水火既濟の卦より當つて、西施國を傾くる不吉の占、一旦勝利有といへ共日ならずして災生じ終より全からざる前表只幾重とも思ひどり下されよと、事を分けたる諫の詞いへ共とかくの返答なく、心なき人へ何ともいひへ、身をもおしまじ名をもおしまず、といよ／＼謀叛の思し立てござるよなど、いはせもあへず豊後が首討てかたむる謀反の首途、適よ、此上は軍の手配、いで出陣の用意をせよ、ア所存の程こそ

○同二日の段

何と三助暑くてこたへられぬじやないかい、此下郎より何が成る、朝
とくから手桶の切り水、くれ方も又此様に汗水と成てのはき掃除、から
も後の世と大將と生れてくべいと思ふが、どふであらふなあ、されば
此本能寺を假殿としてござる春長様、前生の鬼おにだと云ば、奴が大將と
ならぬ事も有まい、などいへり傍から珍内珍内が、間搦二人ながら何をい
ふぞい、死での先先片かた便よし、奴から大將と生ながらなられた眞柴殿、それを
知りつゝ、ほんとやれ、來芝の事事由男ゆめとして、山村程今さとをため、里虹さと
者ものじやといひるゝ市紅いちくが肝心かんじんだと、とつと笑ひの折おりこそあれ、ヨリあ
れと見ゆるは先供、なむ三春忠様の入いりだと猫ねこと鼠ねずみと奴共うぶつおのが部屋
へと遡さかて入程なく近付く銀ぎん乗物、數多の武士が前後をかこい築地つきぢは門
と昇あすゆれば、かくとしらせよ森の蘭丸、禮義正しく出向ひ、阿野の沿局
は苦勞くろうと存じ奉ると、詞の内と乗物の戸を開かせて阿野の局、三法師君

を抱まいらせ、しづくと立出、春忠様の名代と此君の入故、祖父君
春長公より迎ひとして、自がもりまして參りし、殊のふきげんもよ
ろしく、お嬉しう存じますとのたまひければ、それへ一段さぞ祖父
君又もお待かね、いざさせ給へと蘭丸が案内よつれて付く。も門内は
して入よけり鹿の音むしの音もかれぐの契り、あらよしなや、形見の
扇よりく、猶うら表有物、人心なりけるぞや、あふぎとい空言やあ
でぞこひそふ物をく、局調が一曲出來たく、梓春忠が名代孫殿へは
馳走よ、何と面白いか、つげくと大盃さかはつと心得しのふがお酌しやく、蘭丸
へはす所なれ共阿野の局が舞の一手勞さわを謝する其爲よ局へ盃さしす
す是れふつかる一かずと奏意よ叶ふて此上もなき身の冥加とい
いひつゝ局は盃、少し引受差置べ、春長公笑壺えづかよ入、調蘭丸局が間を仕
れど重きに謎も詔なく、仰よひへ共一滴も及べぬ某、此義の偏ひだりよは高免

を、ハテ、呑み所を呑すが興、着ひ汝が望次第、すりや御着を下されふとな
 き六十餘州を手よ握る此春長、何なり共望めく、ハ然らば何とぞ此
 蘭丸よ、軍勢を四五千斗下し給はらば有がたからんと相述れば、心得
 ぬ汝が望もし軍勢をあたへなば、さんい丹州龜山へ押寄、只一戦よ光秀
 が首討取て、君の災をさけやさん、成程尤なる願ひなれ共、いらざる心配
 無用く、左様な事よ骨折すと、早く一盞かたぢを傾けて、暑あつさじゆの養生
 飛立斗り有明の、よる晝となき樂しみの、榮花さかざなよも榮耀さかげよも、此春長よは
 及べぬく、我君のほ誕ほたんよりへ共、安土の無念を散せんと一度は謀叛
 の簾を上、窮鼠返つてほ身の大事、遺は若氣わかげ、北國よ、柴田勝家西國よ、
 真柴久吉、龍に翼の尾田春長、君のほ誕は去事ながら蘭丸殿の詞の如く
 油斷大敵、ハテ、サテ、局迄が同し様よ、いらざる此塙の長詮議、ほ客人が喰ふら
 ハテ、眠り身もほつと退屈たうじゆ、一睡ねぐらの夢ゆめの間の契りひいざと戯たわむれて、座を

立給へば阿の局若君誘ひしづゝと帳臺深く入給ふ跡ようつとり
蘭丸が心一つよどつ置つ思ひは同じ女氣の人目しのぶが寄り添てす
蘭丸様もふ何時でござりませふな^アこれはしのぶ殿そもじへまだ奥へ
行すか^{テイハ}扱それい不辱千万^{ハ用}もあらん早奥へといふ顔じつと打
詠^詞ほんよまあ女の心と男とはそれ程迄違ふものか兄齊藤藏之助殿^ア
お頼^ヤて春長様の奥勤もあなたの傍^モ居たいべつかり今更いふも
恥かしながら去年の初春洛東^{ハシヨウ}の地主の、お庭の花盛り妙共^ア誘はれ願
ひかけまく初戀の、色も香も有殿^ハぶり觀音様のお仲立、互の胸の下帶
も、とけて嬉しい新枕かわるまいぞのお詞が直ぐ^モ心の誓紙^{セイシ}ぞと片時
忘れぬ女房が、お傍^モ居るがおいやならいつそ手^モかけ給はれど、びん
とすね木の糸櫻^{シラサギ}花も亂る、風情也、さしもに猛き蘭丸も心の外の曲者
も、取ひしがれて背^モさすり^アもふ何事なふやせしがお氣^モさへらば

眞平く、百万の強敵がうてきよりもびくともせぬ某が、斯の通りと手をつけべ、
又人をじゆつながらすのかいな、春長様も大方よ、班女はんじょが閨ねやのお陸言おりと、お
局様の取楫かちで出船の相伴しあわせ、ござんせと手を取りれば、ハテ扱たしなみや、人
目を忍ぶ二人が中、殊こと々今宵こよの君の直宿のぞの又の首尾しゅびをとふり切を無理よ
引立奥うちの間へ、入やいるさの月かけよ、しのぶの亂れ、亂れあふわりなき
夢や結ぶらん、早更はるか渡る、夏の夜の、そよ吹く風も物すごく、寐られぬ儘まことに、
佐大將、手づから、障子押ひらき、何心なく茂しげみの方見やりおまへば、
ははと驚きさはぐ、塘ぬまの鳥う、いふかしや、まだ明やらぬ夏の夜よ、庭木を
はなれ騒ぐむら鳥、合點行じときつと目を付、あやしみたまふ時ときしもあ
れ、遠音とおこゑよひゞく鐘太鼓、春長つゝ立耳たてみみそべ立たて、次第よ近付人馬の物
音、直宿の者ものあらざるか、急ぎ物見ものみを仕れど、仰の下お阿野おのの局長刀きょくじょうとう
い込走り出だ、君の大事おほことよひぞや、蘭丸殿らんまるどのは何所どこよ有早く物見ものみを致されよ、

むらはも俱よと表の方、呼はりくかけり行聞よ蘭丸一間々飛で出れば春永聲かけやく蘭丸、反逆有と覺へたり、急ぎ物見を仕れど、上意よはつと蘭丸は振返り、見る廊下の高欄是幸の物見ぞといふより早くかけ上り、四方を急度打見やり、物のあいいろわからねど、此本能寺を心ざし押寄るゝ察する所武智光秀、^{アリヤ}光秀が反逆とな今こそ後悔汝が諫聞入ざるも傾く運命、只此上は防ぎの用意、^{ハヤ}委細承知仕るが縦一致よ防ぐとも院内わづか三百餘人、思へばく主君と俱よ、蘭丸我君様^{チヨ}口惜やと主従が怒りの歯がみ逆立髪、無念涙の折からよ、表の方よ森の力丸、廣庭よ大息^{ツギ}、^開油斷有な兄者人、武智光秀我君よ、多年の恨を散せんと手勢すぐつて四千餘騎、左馬五郎を始どし、或ひ齋藤藏之助築地間近く押寄せてひどいふ間もあらず蘭丸は、其儘ひらりと飛ぶりて、我君よひ恐れながら防ぎ矢の用意有て然るべし、^{ハヤ}某がかしこよ向ひ、一當あ

てし眼ねりを覺さるさん。力丸來れど兄弟は飛とがごとくよかけり行跡打見や
り春長公、此上は防かぎの一矢、先差當つて一大事は三法師ヤア、ソラツ宗祇若を
いざない早くく、シテ詫の下よかひトしく、しのぶ諸共茶道の宗祇若
君いだき参まつらせて足もわなく、胴ぶるひ、しのぶも俱ともうろ付所へ多
勢を切拔阿野の局、其身は數ヶ所の痛手ながら、血み染長刀かい込で心
も強たけみ立戻かかり、シテ我君様最早敵いぢハ込入いれてひへペ、君きみも替かつて一と軍
は身みを遁のれ下さるべしと、口くちよはいへどは名残、涙彌增斗也ヤア愚ぐとなま
なか身みを遁のれんと返つて名もなきやつ原ハタケ、首くびを渡わたさべ死後死後の恥辱、汝
は我わ成なかはり宗祇引連れ三法師ヤアを何なんぞ守護しゆごし落延おちのびて、此旅諸共
久吉が手てよ渡わたし、我存念じゆねんを晴はらさせよ、猶豫ようよは返つて不忠ふちゆうの至いたりと仰あよわ
つと泣なくづふれたれ、假ま令めい不忠ふちゆうも成なざても、君の御最期ごさいよそよなし、何なんぞ此儘
落おちられふ、此義このぎのお歎なし下さりませ、是ぜを思おもへは自じらが、宵よの酒宴しゆえんの其時

又班女が閨のかこち言、其一さしのあふぎとい別れを告るしらせかど恩ひ廻せりいと猶、悲しいわいのとどふと伏歎沈めばお道理ど心をくんで諸袖をしづるしのふが俱涙、泣音をそゆる斗也、數多の切首片手え引さげ庭先へ立歸つたる森の蘭丸、それを見るより春長公（おき）、今え始ぬ汝が働（シテ）く様子（ハ）いかよく、さればひ、二條のほ所へ武智光安立向ひ當手の寄せ手（ハ）左馬五郎光俊采配（みつけ）取てきびしき下知、なれ共味方（ハ）必死の勇者（ハ）覽（ハ）のごとく首討取、一泡吹せ（ハ）へ共、始終の勝利（ハ）成程く、只此上（ハ）潔く死出三途も主従俱（ハ）、サア今聞通り我覺悟、早く此塲を落延（ヨヒサ）よ、お局君の先途を見届くる。此蘭丸、片時も急ぎ裏門（ハ）、宗祇坊（ハ）何をうつかり、チット合點（ハ）、もふ最前から落たふてく氣（ハ）上つり、ヨレくこのぶ殿もは供の用意といへど遠々忍び夫、言たい事も面伏せしはれ、

江へ立上れべ。蘭丸聲かけしのふの君の供叶ひぬと聞て、惄り驚く
しのふ。^謂そりや何故、汝よお咎なけれ共、そちが兄齋藤藏之助光秀よ
一味の反逆、敵の末へ根を^{たつ}斷て葉を枯す、命を助け其儘歸すは是迄、^{ザア}是
迄君への宮仕と明て云はねど妹と脊の中を^{へぞ}隔の垣となる。しのふが要
身詮方も涙ながら用意の懷劍咽^{くわんのん}みがへと突立れべ、何故と驚く人
大將春長感じ給ひ、女ながらも遁の生害、兄とひとつでない潔白、今
日只今春長が仲人し蘭丸が宿の妻、心残さず成佛せよと仰み手負蘭丸
もはつと斗ふ有がた涙顔^{よめん}と紅葉のからくれない血汐^{けいじき}と染る兩の手を
合すも二世の名残など物いひなげふ夫の方に大將をふし拜み笑顔を
娑婆^{しゃば}の置き土産、あへなく息へたへよけり、歎をよそみに大將、勇を付ん
ど^{ヤア}く蘭丸、我^ハは是よて討手を引受、此塲を去らず討死せん汝^ハは是を馳
向ひ、敵のやつ原一泡吹せ、名を万天^{まんだ}と輝かせよと勇め給へば、^{ハシ}仰み

や及ぶべきたとへ光秀、何万騎よて寄する共、片はしなで切まくり立君のほ供仕らん早おさらばと立上れば、涙を拭ひ宗祇坊局をいさめすしむれば、是非も涙よ袖の浪、たゞよひながら若君を、宗祇が背よしつかりと、是ぞあふぎの憂別れ見かへる名残、見送る名残、又立戻るを蘭丸が、中を隔つる鯨波ときのこ、早亂れ入る諸軍勢切立なき立女武者、其名も、高くかな書の筆よどりめて末の世の美談びだんと、こそ「成みける、寺中は合戦具最中、力丸蘭丸一同よ一進一退離散たるりさんして、或は討れ或は討、つゞくあらても有らべこそ堅甲利兵けんかぢゆうの大軍を防ぎ戦ひ流るゝ汗と湧出る血汐、から紅いよ水くぐる龍田の川よ楓葉もみじはの落て流るゝ如くなり寄せ手の從將安田作兵衛、春長を討取らんと、堀際へりぎわよさし寄せど、味方の勢よ隔られたやすく内へ寄付かれず、得たりと鎗を力杖じきぢぢう、ゑいと一はね高堀たかぼりよ、飛上りたる早業さそく目ざましかりける「次第なり、さしも名高き靈場れいじょうも修羅の巷ちまたと

鳴る鐘の天地又ひやく陣太鼓亂調^{らんてう}打立^{たて}、先^よすみし田島の頭
手勢引具^{そじゆぐ}し一同^{ひとしやう}おめき叫^{さけ}んで攻^{せめ}かくれば、春長公一^{ひとつ}越^{とお}調^{しらべ}、反逆^{ほんやく}光秀は
いづくも有^ある主^{ぬし}と背^{そむ}く天罰思^{おも}ひしらせてくれんすと弓杖^{ゆんじょう}ついて罵^{ののし}る
大音^{おおこゑ}さしも勇有明智勢^{いのちぜい}恐れて思はず進かねたぢろく隙^まよし詰引^{しづひ}詣^{くわ}
射給ふ矢先^{やさき}と先手^{さきて}の軍兵^{ぐんへい}ばたくと射たをされ、あだ矢^{あだや}はさら^はな
かりける、此虛^{うき}乗て坊丸力丸、鎧^{よろい}をひねつて八方へ突立^{たて}なぎ立阿修羅
の如く廣庭^{ひろば}として追て行^ゆ、客殿^{きやくでん}は春長主從^{ひき}膝^{ひざ}をならべてどつかと座
し、力丸無念^{むねん}の歯^はがみをなし^し、口惜^{くち惜}や往昔^{いわんじやう}天文年中^と、今天正十年迄^と、四
海^{かい}の内^{うち}よ横行^{わが}して、武威^{ぶゐ}を以て天下の兵亂^{ひょうらん}を切しづめ、民^{みん}を塗炭^{とたん}の中^{なか}
すくひ、四方の敵國君^{あわいぬし}の英名^{えいめい}を鬼神^{きじん}の如く恐れふるひ、正二位右大臣^{じょうにいだいじん}と
昇進^{じょうしん}し、大業既^しみ成就^{じょうじゅ}せしと逆臣^{こわぢん}惟任^{ただとう}が爲^{ため}よ空しくならせ給ふとは、天
魔^{まつ}の所爲^{せい}か口惜^{くち惜}やと、血汐^{ちけい}よそゝぐ、血の涙^{なみだ}としめかねたる斗也、春長一

言の詞もなく、ほはかせを脇腹へ、がはと突立引廻す、俱よ冥途のほ供と
力丸坊丸殉死の切腹むぎんといふも餘り有ほ身の果ぞ「あれなり

○同三日の段

董卓は漢室を焼捨伯知ハサウエイ水を以て趙テオをひたす、例ナムを爰ハシマ眞柴が軍師名
え高松の城廊ヒヤウカも水死の合戦ガクゼン強勇ガツヨウも手よ汗ハラハラ搾スルる斗也、武家の家でも姦アキラハき
姫共ヒメコの寄シタマこぞり、何ナニとあげは、毎日ノーハイふる雨で水の増るが癪アレハの種ヒメ、是シテと
云ヒムも尾田勢の皆仕業ハラハラ中でも憎いハシマ眞柴とやら松葉とやら、突ハラハラさがして
やりたいわいのふ、サく其突次手ハラハラ手ハラハラおいたはしいハシマ、妹ハシマの玉露タマロ様、浦邊
山三郎様ハシマきつい惚ハラハラ模ハラハラ大方坪ハラハラの明く時分ハラハラ成ハラハラて、山三郎様ハシマの爺ハラハラ李ハラハラ之
進様ハシマ、林丈左衛門ハラハラめふ討ハラハラれなされた故ハラハラ、此程ハラハラはふらハラハラと懸病ハラハラひハラハラ、
そふはかいのふ、こちらも覺の有事ハラハラどふぞ首尾ハラハラして上ハラハラましたいと、遠や
さしき女の情ハラハラ打連一間ハラハラへ入ハラハラよける、思ハラハラひ内ハラハラよ有ハラハラ、其色眼中ハラハラよすハラハラむと

かや、父の最期より亂れ髪無念の仇を角額かくがく浦邊山三郎利氏としお、主の留主を窺ふて林を一太刀恨んと、屋敷へ入込生死の境斯と白齒の玉露が、出合頭かしら見合す顔はつと驚き引返す、袂たもすがりに待てたべ浦邊様うらべさま、お前まへ深いお望が、有てのお越こしと、見たひ違はぬ形かたちかたち、其お姿すがたみ懸けられ、送る千束つかの返事かえごとさへ、ないにつけないお心こころぞ、せめて一夜の添臥そべりを、赦してたべと取付いて、じつと、じめたる手の内うちみ心、餘りて見へよける、ごく聲こゑが高たかい、推量すうりょうの上は包むよ及およばず、かくまい置かるゝ敵丈左衛門、何卒どうぞ今日中ちゆうよ手引して、勝負かつぶをとげさせ下さらば、こなたの心もむそくよせじや、何としせいたる面色、玉露も胸むねをすへ、成程なるほど私わたくしが爲ためよも舅おじの敵折てきせつを見合せ、垣越はなこしみ案内あんないよましよよ、其詞ことわみ違ひなくば、まだ云聞いふす子細こざいも有あ、こなたの部屋へやへ、そんならこふと手てを取とて、顔ほの上氣じょうきみ散花さんかの玉露姫とうろくひめは晴はるかの霧濡ゆれよかしこへ入いみける折ときもこそ有あれ立たつ歸かへる館やかたの主ぬし

清水長左衛門宗治智勇を兼し其骨柄、跡よ從ふ、女房ひまだ、十九二十二
つ三つ、雪の白粉やり梅が紅花色そふ、綠子をいだきいたり立歸る、宗
治の眉をしりめ、ややり梅晚春の末より三家へ人質、猝諸共遣へせし所
いまだ合戦の勝利も決せず、敵よかこまれたる此城中へ歸されし子
細が有ふ、何とく、尤のお尋、此度三家に加勢よ向ひ給ふといへ共、手
を空しくして日を送り、水の手一つ切事叶はず無念なり夫逆も同じ事
もし討死致されて大事と成、手立を以て一時の合戦へ遠からじ、それ
迄の英氣を養ひ置るし様、うさを晴すに此若、隨分くやり梅も、心を
付よとはげしきに謎、此子の顔も見せたさ、見たさとゑくぼよ愛持つや
り梅が色ぞこもりて、見へよける、義よはり誥し宗治へ、指折て日をかぞ
へけふの早六月三日、皋月の末より敵方よ大變有凶星を見極め置つる
よ、土儀を突上優長なる仕かた、間者を以て敵方の様子、聞出さんと思へ

共、是ぞといふ謀なく、空しく入水する時の後、諸人の物笑ひ降参する
ハ家名の恥辱是迄度々の合戦又不覺をとらぬ宗治が、猿冠者如きの計
略、斯口惜き籠城も天を我を責給ふか、何とせんかとせんと名ふ秀たる
武士も傾く運と突息も天をよらんで、るたりける、あひたゞしく庭先へ
士卒一人かけ來り、何か談ずる筋有と郡家々の使として、安徳寺和尚只
今本陣へ參着せり、駿又も早くに越と云捨家來へ引かへす、汝が歸城
の上安徳寺の使の様子聞捨がたし、是より諸士は對面致し、事の子細をや
聞ん、其方の郡より預り有丈左衛門因人同前なれば万事心を付よ、行く
心得ましたと立上り奥と表へ引別れ二の丸さして出て行、雨吹拂ふ松
風の夏山とめし、虫の音をゑるべよ、漂ふうらづたひ振も小づまもかい
し、夫を道びく健氣の玉露花も木草も落花狼籍、互々切合ふ種先
とはさき汗よひたする斗也、いらつて切り込太刀先をしつかと請留丈

左衛門シテア小賢コトハシい浦邊山三、儕カモニが親の空之進、評議の席シテよて某タマ又惡口吐ハシナガシし入耳虫ヒラタノミ討ハサウて捨たを恨ミ思ムひ、刃向ハタハタひ立タマツ及ハシメバぬ事ハシメ、タマぬかしたり丈左衛門、左いふ儕カモニ冠山カモニの落城ハシビヤクをよそシテ見て、當城カモニへ逃ハシメ込スルし人畜生ヤクゼイ、父の怨ハシメ旁カタドの恨ミ思ムひ忘メれよと刎ハサウかへす刃尖ハサワタき双方カモニが請ハシメつ流ハシメしつ烈ハシメしき争ハシメひ、見る玉露ハシメは心ハシメも空ハシメ山三ハシメが念力通ハシメしけん林ハシメの刀打落ハシメされ、逃ハシメんとするを切ハシメ入ハシメせく、父の敵覺ハシメへよとのつかハシメつてどどめの刀、首引切ハシメつて大地ハシメ打付ハシメ、嬉ハシメしやく、玉露殿禮ハシメの未來ハシメでおさらばと、腹かき切らんとする所ハシメ戻ハシメりかゝりし長左衛門、やリ梅諸共走ハシメり出ハシメ死ハシメるとはうろたへ者ハシメ、歎ハシメしなき敵ハシメを討ハサウし言譯ハシメの切腹ハシメならば、某タマが計らひを用ハシメひ、まさかの時ハシメの討死ハシメこそ武士の道、城外の水ハシメくより、久吉の陣所ハシメへ駆ハシメ込スル、僞ハシメりならざる次第ハシメを頼み、かくまひもらふが術ハシメの第一、敵ハシメの空虚變ハシメの次第ハシメ、相圖ハシメを以ハシメて知ハシメされよ、折ハシメも有ハシメは眞柴ハシメを討取ハサウ、名ハシメを末代ハシメ残ハシメされよ、タマ一時ハシメも早く

くとせき立清水、ハア有がたし、武士の數も入べき大功命を的み仕負せて立歸らんと驅出す。山三様お待なされ玉露様とのわりなき中最前ちらりと、キヤ宗治様、お妹ひと浦邊様との二世の縁、すき合た二人が中門出を祝する、扇も時の島臺士器松の元來常盤木の、繪よりあらざる松竹梅、末廣びろと夫婦のかため、ハア重この恵、玉露殿も隨分無事で、お前もお怪家のない様と、立派よいへどなま中よ、馴し枕のもつれ髪はなれ、がたなき兩人を、わざとせいする宗治夫婦、扇屏風やあふぎの別れ、心定めて城外へ飛が如くよかけり行、囊沙背水の謀を廻らし見ぬ唐土の元帥も舌を巻べき寄代の軍術、水かさ増る大河の流れさせりとめたる土俵岩石、大木運、六地車の木やり音頭もちんば馬、揃ひぬ肩も降参のすき腹武士玄られける、加藤の土手の高みよ上り、ア者共、渢等ハてぞドく降参の者共成、此度の勤功、大將始某迄満足せり、此合戦終

うなべ、急度^{シテ}扶持有べきぞよし。兵糧^{アラマツ}を遣ひ終らば、暫時^{スルヤハ}の休足致すへ
しと、下知を傳ふる其内^ミ又向ふ^ム何か騒ぎ^シ人聲^{ヒノヨメ}正清きつと打詠め^{ハシメテ}
合點^{ハシメテ}の行ぬ、高松の城外^ムあやしき取合^{シテ}、何^ムもせよ心得ずと瞬^{ハタキ}もせず
見渡す向ふ^ム、我組留んと數多^{アリタタ}の軍兵、小船^ム打乗^{シテ}右往^{カクシテ}左往^{カクシテ}、追廻せば、
山三郎^ハ水中^ムをくゝつ^タ、拔^{ハサフ}つ働け^{ハシメテ}、鶴^{ハシメテ}よりも早き水練水魚^{ハシメテ}、そこよ爰
よと組子共^{ハシメテ}、うろ付中^ム、舳先^{ハシメテ}を持^{ニシテ}、といやうんと打返せ^{ハシメテ}、水^{ハシメテ}まんく
小船^{ハシメテ}の組子浪^{ハシメテ}のもくすと成り^{ハシメテ}、此有様^{ハシメテ}残りの兵船^{ハシメテ}、進みかねて
ぞ見へ^{ハシメテ}えけりこなたの岸^ムは正清が、何者成ぞ心得ずと手ぐすね引て
待所^{ハシメテ}へ、血氣^{ハシメテ}の浦邊^{ハシメテ}拔手^{ハシメテ}を切^{ハシメテ}、忠孝二つを額^{ハシメテ}當て、飛鳥^{ハシメテ}の如く遙^{ハシメテ}の堤^{ハシメテ}
一聲^{ハシメテ}諸共^{ハシメテ}飛上れ^{ハシメテ}、何者成ぞと取巻雜兵目^{ハシメテ}もかけず、加藤^{ハシメテ}が前^ム兩手を
突^{ハシメテ}、某^{ハシメテ}の郡家の家臣浦邊山三郎利氏^{ヒサシ}と^{ハシメテ}者^{ハシメテ}、高松の城内^ムおいて、親の敵
を討取^{ハシメテ}、立退んとせし所^{ハシメテ}、城中^ム討手^{ハシメテ}かゝり手詰^{ハシメテ}の難義^{ハシメテ}何^ムぞ武士のふ

情みにかくまひ下さらひ生う世うのに厚恩と敬ひ入てぞ願ひける、加藤正清聲をあらしげア紛らひ數願ひの筋誠親の敵を討は武門の譽と
郡家^{クニ}恩賞も有へき筈返つて搦捕んとする高松勢、紛らひ數邊の僞
り、眞直みゆされよと疑ふ詞^ハア尤成るに仰、某が討取し親の敵とす
ハ冠^{カヒ}の城を拔出し、林丈左衛門とヤ者、我父空之進と聊^{ハシカ}の論より、父を
歎^{ハシ}し討^{ハシ}み討^{ハシ}たる奴其無念止事を得ず何ぞ怨^{ハシ}を報せんと主人へ敵討
を願へ共、軍中とて取あへなく、剩^{ハシ}へ敵丈左衛門ハ清水宗治殿^{ハシ}と預けと
成べ心み任せず、空しく月日を送る内、此度の合戦^{ハシ}付、久吉公の計略^{ハシ}
て、一城諸共免の如く、水底のもくすとならんは必定、然^{ハシ}り父の鬱憤^{ハシ}を散
せん時節なしと透^{ハシ}を窺ひ本望は達したれ共、に赦しなき敵討、いか成^{ハシ}答
有^{ハシ}も知^{ハシ}ず惜^{ハシ}むべき命みハあらね共^{ハシ}、兩親の跡をもいとなみ、其上^{ハシ}
て切腹致す我存念暫^{ハシ}しが程のに惠^{ハシ}に聞届下さらば、忘れ置じと手を摺

て、頼めば正清よつこと笑ひハ、事明白成る汝が願ひ、尤其理なきよへあ
らね共敵アリしたる此時節諸卒の疑念ギギヤウもいかゞなり、万事は主人の賢慮ケンリョウ又
有ん、日も早西ヒタチよ傾けペイマ同道と、正清が深き心の計らひや、士卒來れと
夕ばへの下知の詞ハシメみ、ばはつと、立上れ共内心ハラハラ、久吉討ん血氣の若者毒
蛇の口の水筋スジを伴ひてこそ行過る、向ふ遙ヒツキよ漕渡カモシタる主シテ、誰共白浪ハタマツを振
と衣の戀無常、急ぐ船路や行空ヨコウも浮世ハヤシタ、なりける、次第也

○同四日の段

東魚來つて四海を呑む、西鳥來つて東魚をくらひ、四海既ハヤシタよ穩ならざる
戰場の地の理を窺ふ山づたひ、近習召連隆景タカカゲは、じづく、谷間ハラハラよ立休ら
ひハナシく旁此度の合戰誠ハサシタ、武門のはれ軍、郡の枝城尾田が爲に悉く落城
よ及びし上、軍慮ハサシタよ賢き清水が城廓ヒヤク、久吉ハカリが謀ハカリよ乗せられ、入水ハシマツと成たる
高松の味方を助ん其爲よはるハル、此土ハタチよ陣ハシマツを取れ共、敵の要害強くも

て味方を救ん術なく、三家の心もまちくたるよ、三澤久代が非道の企
隆景が見察違はず白狀の上より本へぼつ返し禁籠ヲ付し上は、敵方へ裏
切なさん妨なけれど、先此山の頂より棚を結敵陣を見つめ、明日中より
攻かしり、敵の勇氣を試んはサアくいかゞく、さゝ仰迄もひかず、我々共
に先手を乞う請雌雄の合戦、一命は風前の塵、義は金鉄、千變万化とかけ破
り、さしも名を得し久吉が頭を取んな瞬く内、心安く思し召と實いさ
ましく見へよける、遙向ふ人音は何者成かと見やる内、現世未來を一
寺より納め、天地の僧頭安徳寺、清水が妹玉露姫伴ひ歩む一木の影、それと
見るより手をつかへ、ハア隆景公より勝負のてい恐悦至極、拙僧今日清
水長左衛門様へお陣見舞ふ参りし所、妹玉露様を以て何か密談の如
使、味方の諸士とも心置く籠城、幸なる安徳寺誘ひくれよとの如頼、委し
き子細は存せぬ共、是迄同道仕ると、や上れば玉露も面はゆげなる顔を

上、女のあられぬ事ながら、敵の陣所へ使の役、隆景様のは賢慮けんりょを、伺ひました其上と、兄上の差圖故、安徳寺様諸共、見舞旁參りしと、差出す文箱小梅川、手て取とり上あて讀よ下さし、一旦和議を相調あわせい、事を計らん。計略有れど、先達て、遣おとはせし所。此使めし、惠瓊老、清水の妹玉露を差越さしあげんとは面白し、去ながら、大地の住職、敵陣への使者とは憚おのり有るど、他聞を恐れる密事ひそかことの大役、足下そくかならでは叶かながたし、先ま陣屋じんやへ入いせられ、暫時まんじの休足くいしゆあるべしと、詞の折せきもこなた成なる、茂しげみの枝えだ、飛と違たがふ數多すうたの鳩はとが、あらそふ餌あくべみ、は隆景りゅうけい屹度屹度打詠たうぎやうめはアあれ見みよ、只今鳥類の餌あくべみの爭あらそひ、思おもひ合あつす。昨夜の夢、我陣中へ飛とくる村鳥、色めきたる草葉くさばをくいへ、塵塚山ぢづかさんをなしたると見みへて夢散ゆめちるせしと、目前人まつめにんを恐れず餌あくべよる鳩はとの嘴くち先まよて、賓ひんつきたる。あの蔓物つるもの、瓜うりの春長しゅんじょうの紋所、三つ五つは五体ごたいを表ひらし、其身そのみを包む衣服いふくこそ敵の城廓じょうらく、鳩はとは源家の臣鳥しもとり、我は清和の末孫すゑそなり、此蔓物つるものの瓜

よりし尾田春長を一戰々討取べき神の告か、但しは既々變有告かば
あやしやと明慮の大將、尾田を討たる光秀が、京都の大變神鳩のふしき
の後よぞしられたり、安徳寺すしみ出御、智人の仰至極せり、唐土周の世
よ當つて、赤色の鳥武王の陣さ泊よる人ひと怪あやしみ迷まふといへども大公望
是を吉なりと悦す、果して其詞ことわと違ちがはず、周武の正じょうと天下じやと成、君きみと眞其
如く今陣前じんぜんよ鳩はとの集あつまりきたるといふは當家の吉瑞、愚僧ぐそうもそくはぬ戰
場ばの役目えきもくもやはり此姿しそう赤色ならざる此衣の頭かしよ取入いれて、強氣ごうきの
尾田方取ひしも、國家こなの爲ため天下じやの爲ため、王露おうろ様さまよもに油斷ゆだん有なま、
念ねんよ及およぬお僧ごそう様さま、わたしも名なよあふ清水が妹めい、見馴みな聞きなれ軍學ぐんがく軍術ぐんじ、夫
よ迫おさり力を合あせ、味方みがたの怒おこり兄お様さまの、無念むねんをはらすハ敵の大將久吉が、首
討う取とて立歸たちからん、やはか仕損つかひじよべきと、詞ことわ涼すずしき玉露たまろがおめる色いろなき
武家ぶけ育いく、さもいざましく見みへよける、かゝる所ところへ味方みがたの郎等らうとう片山藤太かたやまと、水

みひたせる惣身の、汗諸共々押拭おしひ仰あがの如く水中をくゝつて敵の陣所
又近付事の様子を窺ふ所、猶も流るゝ水筋を、せき切る手當の石檣いはらわ或も
土俵蛇籠じやかごの用意、是をさしゆる清水が郎等、忍び入て水筋を、切んとあせ
れど敵陣の備そなへへは名々あふ加藤正清近寄る軍兵事共せず、右と左とな
ぎ立て、追立切伏られ水の哀れと流行清水が勢の敗軍ほいぐんへ、目も當てられ
ぬむざんの有様、かくて空して時日を送らば底のみくづと成行城兵なげんりよ
賢慮けんりよ有て然るべしと、息繼おひきぎあへず訴ふれば、隆景たかのぶハ打黙頭うちまくとうかく迄敵よ
取切れぬけがけして高名せんとい、自殺じそつを招く清水が城兵只此上うへハ惠
瓊者えいしゃ宗治むねはるヒヤ談せし如く、玉露諸共久吉が陣所へ立越、兩家和睦わいわの計略
こそ肝要ならんと隆景が詞ことみはつと頭を下あ修羅ちやまとの巷わへ出家の身の、入
べき筈はずハなけれ共危急ききを救ふも教おの道、玉露様たまらさまハ用意有といさみ
進めバ神妙かみめう、兩將へも此趣こうす具々某言上せん、イザ兩人も本陣へ同道どうどうヤ

さん來られよと物よ馴れたる小梅川、其名かんべし武士の、刃切れはさみ
直焼刃はざまののこ、きたひよきたふ隆景たかがが没すれば、世よ顯あらわせり

○同五日の段

聞鱗山揮一同して風雨烈しき中國の物騒がしき蛙が鼻久吉公の陣館
亂杭高垣幕ゆひ廻し兵具ひとつとならべしれ事嚴重よ見へよける太
郎兵衛治郎兵と呼集め落葉枯枝をかき寄せて濕氣を拂ふ雜兵共一つ
所よ寄集り何と斯した所はかんしやうゆうの煙りと出かけたチカ今
も合戦といふたら戰場の切合集錢出しの呑くらい軍場の小商人の
手目上させてやらふ物何をいふても長の籠城我身で我身の儘ならぬ
し某連も戰場よ出立なべ彼唐士のあぼす東六が奇計を以て鎗先尖き
餅田樂串ざしながら擲喰鬼殺しと見るならばあたり次第よ呑ほして

代物といふ大敵より、喰逃、香逃早いが勝と物とか、咄しの耳を突拔鐘スリヤ
こそ軍が始まるど、達者な物は口斗、足もしどろみ立て行スバ事こそと加
藤正清、一間を出る庭先へ雜兵一人かけ來り、只今遠見いたせし所、あや
しの兩人陣中さして参るよし、引とらへて詮議シテイ及び所、郡高松兩城
を使者として、女一人僧一人通しませうやと窺へば、使者と有れば捨
も置れず案内致せと追つ立やり、待間程なく取次タチ、従ひ来る葉月の使
者は二八の品形振ヒラカの袂アマ名香の、高き寺僧諸共、使者の座シロ、着き
みける、正清威儀を繕ツコロひて、是はく、郡高松兩城ツカシマの使と有て珍事の御
兩人、お使者の趣承はり、加藤取次仕らん、様子いかゞと正清が尋ね、愛
持玉露ハラが、正清様とやらむ取次の段セグに苦勞クル存じます、自らは高松の
城將清水宗治はるが使玉露とハラ者、清水シマツ越るゝ趣は此方の家中浦邊山三
郎サンラと、若衆様サマ其山三郎不慮ハシタ、城内を抜出たる不忠者ハシタ、かくまハシタ

の由承はり、早々使者を以て所望よ及ぶといへ共御歸し下されざる段我より共不審はれず、もしや使の不念不骨なる事ばし有て武士の意地を立ぬきは歸し下されんも計りがたし、此度ハ汝參つては機嫌の窺ひ同道して立歸れと有使の口上、に前宜しくは披露と詞のあやも玉露つまびらが詳く相述る安徳寺詞を正し、玉露のナさるゝ通り、浦邊山三郎は郡の家人同前故、此方とも使を立るといへ共に承引なきよつて、あたま役よ愚僧が使、どもかくも貴所の御執成偏どきせいへんよ頼存ると、頭を下れば加藤正清何事かと存せし、浦邊よ付て何日といひけふといひ、何か事も有そふなる三家の胸中、軍はわきへ取置て、福原梶田の勇將等馬を出さるゝ此虎之助一切合點参らね共、女義の使出家たる方を、追返すもふとなげなし、取次ハ致しやさんが暫時隙入事も有ん、あれなる一間よ相待れよ、然らば後刻と式禮目禮、玉露引連れ安徳寺左右へ、こそ別れ行じゆ。

明の空も一面の、雲かけ隔つ浮草の、浪よ漂ふ山三郎、又降雨よ足音の紛
れ出るもしめくと、いと、うさをや重ねらん。後のこなたよ玉露が、物
音窺ひ立出る襖もそつと人目の闇盡ぬ名よしの顔と顔、なふなつかし
の山三様ゆ身よふ怪我になかりしかど、縋り付いたる振袖のならぶ翼
や連理の縁妹脊わりなく見へよける。是へ思ひがけもなき玉露殿、何故
爰へ來られしな。此城中へ入込しも兄様の深き御思案、お前よ逢て
力を合せ、真柴を討てとくれド。の仰、首尾能く仕負せ立歸らべ、誰憚ら
ぬ夫婦中、手柄を見せて下さんせど、夫頼の女氣い、胸よやるせぞなかり
ける。我もやたけとはやれ共、一かたならぬ名大將、猿冠者の猿智恵と
聞しよ違ふ真柴久吉、此軍配よ我よ式が及ばんや、所詮すゞく高松へ
へ歸られず、清水殿へのナ譯、只今腹切相果る、其方へ立歸り此通り傳へ
てたべ、さらばと斗柄よ手をかくる夫よ縋り付、待て下さんせ、姫よせ

の身で敵城へ、お使者又来るも何故ぞ、お前よ逢いたさ、顔見たさ、死バ一所とかたらいしわたしをふり捨死ふと、聞へぬはいな胴欲な、わたしを先へ手よかけて殺してやいの我夫と、命惜まぬ武家育、涙色めく婉^{わん}變^{かん}の袂^{たも}、懸の淵ならん、涙隱して山三郎^{ヤア}いらざるくり言嗜まれよ、敵へもれてハ互の耻辱、そこ放されよと突き退る、ハハわたしも俱よとあらそふ後^さ、早まるなど聲をかけ、立出る眞柴筑前守久吉^間、高松^{タカマツ}お使者よ來りし玉露へ、山三郎を返しかたふる、又浦邊へ此書面、久吉が心を込めし清水殿への送り物、此役目仕負^{しむ}せなば抜群の高名手柄早々小船よて歸城せよと、差出し給ふ情の賜^{じまつ}、其文章はしらね共一先城へ立歸り其上生死を決せんと、心定めて押しいたゝき足早よこそかけ出れば、夫の跡又引そふて命の親の久吉様と、悦び足も地よ付かず、飛が如くよ立歸る又も聞ゆる陣鐘よつれてかけくる女武者、金石ならぬと湯王^{とうおう}籠^{ろう}万葉^{まんぱ}を

亂し都より夜を日に繼だる阿野の局、久吉公より見參とよしへる組子事
共せず、廣庭づたひ歩みくる。者共某よ逢んど有女武者、曲者なり。共何
程の事や有ん。對面して取せんす。者共引けどは下知の、聲聞取て阿野局
キア久吉殿かといふを押へてあたりを見廻し、音高しき。自分の形相
一と方ならず、一大事の注進ならば、敵へもれては味方の非運、心を付て
物語られよ。腹帶しつかと、即座の氣付。様子はいかゞ、何とく、ハマば
れべし。春長公より安土を出立ましゝて都本能寺より入らせ給ひ、中國
加勢の手配諸軍を催す時こそ有れ、逆臣武智が夜討の企。何光秀が
謀叛とや、シテ勝利はいかゞく、明れば二日子の下刻水さへ音なき
眞の闇、早洛陽より亂れ入り夢驚かす俄の戰場。太刀よ具足もとぼしき寺
内、數万の敵ハ甲冑よ身と固めたる小手脚當、味方ハ薄衣綾綿濃紅いの
玉襷自始蘭丸兄弟死地より入たる勵み庫裏方丈も忽々、血汐くま取修羅

道の、巷々迷々築山かげ、射つ射られつ切つきられつ劍の山、八寒地獄かんじごくとなる鐘は五臓を射抜君の弓勢、先手の軍兵一筋の飽のぞ、よつらなる三人五人恐れをなして引退くシテ、君ハツには安体ハツよてましますか、氣を付られよ阿野の局ハツア君ハツには安体ハツよてましますか、心元なしいかよくハツア、
も便なき事ながら、運の盡きとて蘭丸殿、田嶋が手鎗ハンドガンよ無念の最期、勝ハツ、
乗たる光秀方、味方ハ残らず討死し、春長公ハツとも腹召ハツされシテ、三法師君は
若君様ハツ細川殿へ落しまいらせ、二條の御所も一時ヒよ亡ハラび火中の煙ケイセンと
失給ふ、是ぞ筐カタハのふ家の御旗此上ハツ久吉殿の智略ハツ、武智を討取亡ハラ我
君の尊靈ハツル、手向てたべや真柴殿と、死る今端の際迄も、君を大事とはり
詰し心の花ハナもがつくりと折ハサウちハサウ行貞心貞死、義女の鑑ハクを殘ハサウしける、始
終の大變聞久吉、身体忽ハサウ壞敗ハサウ、苦しめハサウ途方ハツカよくれて居たりしが、つゝ立
上り大音上ハツ、ハツ旁ハツ我ハツ謀女ハツが不敵、只今某切捨たりと、諸軍の心迷ハツ

ぬ遠智人の名大將、先立主君亡人の生死の同じ梓弓吊ひと入よけ
る無常と傾く夕陽の坊主あたまものび欠び、時刻移ると安徳寺、エヘン惠瓊ホウカイ
の咳拂ひしづく歩み獨言ひとりごと此永の日中待せて置返答もせぬ上より
鷹爪サキのまだな事、鼓屑アヌ一ぶく志シテさへなき大將、主腹斗肥コヤすと見ゆる、餘り
な釣付け様佛の顔も三家の使歸つて此由上アベんと行んとすアタマく安徳
寺惠瓊ホウカイ和尙ハサウいづれへござる久吉對面仕らんと聲かけられ、いや早
愚僧クモニの生れ付いたる近飢がつへ餘りの隙入ヒダリと甚腹キラ中窮困コトコトとせまり、一つ鉢の
ほ芳志ハラシと預り度勝手へ参るといふを打消し、ハテ扱久吉が志の供養くわう有事を
眼メガネ前見捨て歸られるお僧の心底ハシモトいぶかし、そこ動ハラくなど眞柴久吉、障
子をさつと押開き、上段カタと飴カガミ置いたる金鴨キンアヒの煙ケハリも薰ハスルする手向草、心憎ハシモトし
と尻目ハツメとかけヤア大將の詞とも覺へず出家たる我をいぶかり動ハラくなど
の物を知らざる今の一言ヤアいふな惠瓊ホウカイ都の大變ハルカ立聞して、郡カントへ注進せ

んず心底隠しても隠されまじ、軍勢を入れ、修羅を導く悪僧、寺領が望
か知行が望か、返答聞かんと赤前の眞柴屈せぬ惠瓊、大口明いて高笑ひ、
ハニヤアぬかしたり猿冠者、愚僧をとらへ惡僧とい何のたゞ言、濟が主たる
春長の伊吹山の鬼の再來、諸寺諸山迄責苦しめ、佛敵道がれず本能寺の
庭よおるてのたれ死したる尾田の幕下、主よ劣らぬあpare者、五幾七道
でくらひたらず、此中國迄攻下り民家を苦しめ人種を絶さんとする魔
王の根元、亡し絶すが佛の役、奇代の名劍請取れどはつしと打ばしつか
と留ハニ、出家よき嗜童ふどりの坊主が悪口、久吉が耳よひ入
ぬ、誠相手よ成りたくて、天地の道理成佛の明らかなる事を悟りし上相
手よ成りて取らせんと、飽迄きびしき嘲嘆テクタク、奥歯碎くる。無念の眼中、つ
かくと立寄り眼尻逆立息をつぎ、ハニ威勢よつのり人もなげ成今之悪
言、當時安徳寺の大寺を踏へる此惠瓊童劣りとい何をいふや久吉ハニた

とへ大寺の名僧たり共、心中よ六道の迷ひ有てり、成佛の道思ひもよらず、汝が目より魔王まおうと見拔し某か天地の道理をしらせんと、惠瓊を目がけ打かけ給ふ以前の蓮花衣れんげい、是れいいかよとためつすがめつ見て恠り、覺の袈裟けさ、矢剝やくの橋はしよて、天下を得ると見付置いたる奴殿ぬしかと鞠れ果たる斗也久吉よつこと笑はせ給ひ、いかよ惠瓊老、其時そのときへだいなしの一文奴、筭木書物も當てよはならぬと貴僧の詞、後の證と其時そのときより請たるご其袈裟、矢剝の橋はしよて我相面見付し貴僧の天眼通がんづ、此久吉が望む出世しゆせいよあらね共、天あめ生うずる惠なればあしくな思ひそ惠瓊殿けいきょうでん、此上うえの尾田おだと郡の和を結べるむすぶしが出家の役わく、よもや違變たがい有あるまじと、名智の詞こと、安德寺頭あんとくじとうを摺付こすりつけくくてて、理非明白りひめいたる御仰訓ぎやうくん、狐きつねといへる物もの、夜よの微塵びじんの虫むしをも見れ共、晝あたへ大山おおさんさへ見る事ことあたへず、此坊主ぼうしも眞其まことにごとく、御身黒くろどんたる日ひかげの其時そのときによく奇相きそうを見分れど、今天下あひだよ名なを得、武威

白晝よかややく時は相見あたはず見損せし訓狐よ等しき此坊主よ和議のほ謎ひ冥加至極仰み従ひ和談どしのへ奉らんま、早速の會得五の遠の名僧、一刻も早く急がれよと仁者の詞ふはつと天より照す久吉の威勢よ恐れ引かへす道の道なり明らかに心てらして立歸る跡見送つて久吉公心をこらす軍慮の庭先見越の松か枝はつしと射たる矢みれいかよと立寄てかなぐりひらけバ返書の實名清水が自筆一紙の血判つらくと讀終つて表よ向ひま高松の城主清水氏眞柴久吉が一書の胸中射抜しぬ迺な此上う三流を切落し諸人を助けあたふべしいきく是へと清水長左衛門宗治兼て期したる討死の弓矢打捨庭上のどつかと座すし二天運強き久吉殿只今射込みし矢の返書彌いよいよ承うけうけ知下さる上の味方の助命頼み入ると鎧脱き捨腹一文字ふ引切苦痛夫の跡あとをえたひくる妻は手負うぶ見るよりもふいたひしや悲しやな斯なした最期

させまい爲繩一家の人より、わたしと以てのほ教訓無^むなすのみかい
たいけな、此子の可愛ふないかいなど夫々縋り伏轉ひ前後もわかつ涙
居たる宗治苦しき目を見ひらき開愚や女房何くり言、郡三家の人より
某が胸中をよく存知そち達親子よ今生の暇乞をさせんず爲のほ情
チ冥加なや、督アシタナたや、一才の時よりもくらひ込んだる大祿の恩義アシタナ
つか謝すべきぞ、夫々引かへ小知の銘メイ主恩^{シテ}命を捨る數万人の最期
をハ助けん爲の此切腹玉露山三が密書の使心を込めし久吉の書中味
方み取てハ盲龜の浮木悦ベ女房何ほへる氣を張詰めて憚をばよき武
士々仕立上、主君よ忠義を怠るなと高松の良將リョウジョウも子故よくらむ深手の
苦痛、見るよ付ても彌増る夫の最期稚子の行末思ひやり梅の女の浅い
心から、大守の仰誠ぞと斯した別をと知ずしてお跡をしたいきた物を
暇乞さへろくよ云たい事の數々を、いつの世いつの添ふしよ語カタら

ふ物ぞ情なやく何よもしらぬ稚子さへ虫が數へる寐覺の愛てうち
くの父上の、今端を拜む合掌ぞやといだきしめく伏轉びたる女氣
を不便と察する久吉公こたへこたゆる宗治か恩愛一度よたまちかね
清水涌くるはらく涙血水川邊々浪越て土砂吹飛す如く也哀を見捨
て真柴久吉かしこを屹度打見やりく見られよ兩人相圖を以て川筋
の土俵岩石嫌ひなく切て落せばありくと平地とおさまり城外へ遣
れ出たる老若の悦びの聲鯨波どこのこ見物あれと大將の歎おほはつと心付こころ、
幸ひ成かな是よ物見とよろぼひく腹帶玄つかと白布の高見を傳ひ
よぢ登り見ひらくまたよ高笑ひよ女房悦べ死後の思ひ出此上なし
浮世の夢もけふ限り昨日の敵あいむれる白鷗鯨波かみどこのこと覺へしハ浦風
とこそ聞へけり我のあしたの露ときへ清水流るゝ柳かけ玄さなが程
の世の中よ心のこさぬおさらばと白布とかんとする所所へア宗治玄はる

ばしく、小梅川^{たかが}隆景安徳寺^{あんとくじ}が理解^{りやか}よつて尾田家^{おだ}一体水魚^{すいぎょ}の因見届^{いたすいじゆ}けて成佛有れど、聲諸共^よ大將隆景^{おほしら}衣服改^{いふ}め玄づく^くと入來る跡^{あと}は安徳寺^{あんとくじ}、手^て捧^{ささ}けたる白臺^{しらだい}の神文^{しんぶん}と、そこ見へよけり、互^{たが}々^に和義^{わぎ}を取納め、惠瓊^{えいきょう}の神文押^{いた}いき^く^く、目出^あたく^あ和談^{わだん}としなふ上^うの拙僧^{しょくそう}の先^{まへ}へ歸り久吉公^{くわきちゆう}の御神文兩家^{りょうけい}へさし上奉^{あがめ}らんと、禮義^{らいぎ}も足もいさみ立^た衣^いしほつて歸^からるゝ、久吉^{くわ}の詞^{こと}をあらため、兩家^{りょうけい}和順^{わいじゅん}とおよぶ上^うの何^{なに}をかつしすん、主君尾田殿都^{おだ}本能寺^{もとね}とおるて、武智^{むち}が爲^{ため}に落命^{らくめい}を、聲^{こゑ}かきくもる一と重^{しづか}万里^{まいり}とみちて、袖^{そで}しばる、驚^{おどろ}く人々^{ひとびと}を制^{せい}する眞柴^{ましば}、たるみを見せじとつし立^{たつ}上^あり、主人の敵武智光秀^{むちこうしゆ}、都^つと登^のり吊^つひ軍^{ぐん}三家^{さんか}の助^{すけ}力^{りき}あるやいかと、聞^きより隆景^{たかが}とつこと笑^{わら}ひ^く、軍^{ぐん}のそなへ有^あながら手^てをむなししくせし味方^{みわが}の若者^{わがわ}ときたて置^{おき}たる弓矢^{ゆうし}の手前^{まへ}、ねがふてもなき後詭^{こうぎ}の加勢^{かぜ}、隆景采^さをなしやさん^{やさん}、頼^{たの}もし^く、早上京^{あがめ}の用意^{ようい}をなさん、者^ども早

くとほ下知よ、加藤正清始とし人馬せべしと居ならんだり、うれひよしづむやり梅をいさめなだめて隆景公、父^{おと}も劣らぬものしふと小梅川が成人させん、心残さず旅立と、こもる情よにつこと笑ふがいとまごひ、此世の念も宗治が忠義の家名稚子をもうりそだつる仁者の道、雪きれ空も青くと、天王山の晴いくさ、名をとる射とる弓矢とる、天下を鳥の聲よつれいざや武智を討んすと勇む正清兩將も、都をさして出て行く

○同六日の段

折る逆賊武智光秀、多年の恨一戦よ春長父子を討奉り、妙心寺^{みよ}を砦^{とり}を構へ勝ほこつたる諸軍の勢ひ、俱^{とも}威風^{ふう}を顯して備へ嚴しく守りるる、中央より光秀の母さつき様^{じよ}の上^う座をしめて、イナ^シ四王天、何事も見ざる聞かざる云ひざるよ、咄しが有らば嫁女庚申待緩りと聞かふ^{ドリヤ}奥へいて夢でも見ましよと、立を引き留田島頭、後室様の立腹、其理なきよ

有ね共夫れハ一途の思し召幕下と成つて春長へ身を寄せたまひしは
大將時を得て其機よ臨り天の時を知といふ、何卒に機嫌直されて光秀
公よほ對顔偏よ願奉ると願へば俱よ嫁操只幾重よもと手を突て願ふ
心の夫思ひ道理よも又殊勝なり、さつきに少し面を和らげ夫程よ迄皆
の衆が頼みを聞ぬる年寄のかた意路、そんなら息子殿の歸り次第奥へ
立ちしや、ヨリヤ女共へ来て腰を打トコニと老の立居もおもくと嫁が介抱
四王天引添てこそ入りゆける斯たる世よも花開く色香カクもしるき初菊
が、奥の透間を立てほんよマ此重次郎様へ、しんきなお方で有る
いな、こちの思ふ様よもない間がな透がな軍學とやら色の道よ、疎い
ので、一倍心をいためると、女心の物思ひ後よ立聞く重次郎、初菊殿是よ
かど、いふ聲聞いて、ヤア重次郎様か、聞へぬわいなと計りよて跡の得言
ぬ、おぼこさ、赤らむ顔よ顯はせり、是ハ又嗜タジみやいのふ、又してもく、

顔さへ見れば恨のたらど、親との赦しを受け、レ未來永々かれらぬ女夫、少しも隔へないわいの、べくつんともふるしんきな永とやら未來とやら、其先の世へ、しらね共、縁を結ぶの神様が、苦勞なされうない子の、ふり分け髪の其中から、あれとは是との結び合、親の赦しも有る物を、ついよ一度の逢瀬さへない、餘り胴欲な、お情ないと娘氣の、胸の有りたけかきくどき恨かこつぞ道理なり、思ひへ同じ重次郎ハテもふ今迄へ不調法、以後へ急度嗜む程よ、コレ赦してたもく、そんなら願ひを、ハテ誰憚からぬ云号アツケ、世間廣ふ遠慮へいらぬ、忝や嬉しやと、ひつたり抱付く妹と脊よ、わりなく見へしゑよし也、折から轟く轡の音、光秀公のお歸りと、しらせよ、惣り飛退く二人、所体縫ふくなたよ、妻の操も出向ひ、待間程なく、立歸る武智十兵衛光秀、武威轟かす、強將の常よかへりし屈詫、顏席を改め詞を正し、三人共出向ひ太儀シテ、母人よに機嫌よくお渡りなさる

か、ナア 先程も田島頭と自がわつとくどいつどふやらスやらふ口が和
らぎ、母公様とも睦じうぶ、夫れの重疊出かいたく、左有らバ直様ほ
對面、イ、夫より及べぬ、母が直よ參らんと聲うちかけを引かへて、木綿布
子よ風呂敷包せなみちよつこり賤の女の姿、見る者驚く人、操ハ傍よ
摺寄つて、系圖正しき武智のほ家、殊更四海の武將とも仰がれ給ふ夫光
秀、天下のほ母公様共云へる、ほ身が淺ましきお姿ハ若やお心違ひし
かと尋ねよつと打笑ひ、忝くも清和源氏の嫡流たる武智の系圖、元
より武勇の家柄なれば、誰よ恥べき謂なし、老い寄せ共心の鉄石、渴して
も盜泉の水を呑すといふ、お身達もよふ知てゐやる筈、心穢れた我子の傍
片時も座を同じうせん、我日本の神明へ恐れ有りく、伯夷叔齊をな
らひ只雲水よ從ふて出行母、是が此世の別れぞと、義強き母も恩愛の涙
まぎらす有様、哀ぞ増りける、光秀ハ默然とさし眞ひていたり

しが操の方の涙ながら、^レ_レナレ我夫、母様の只お一人、いづくを當と長の旅、
 なせお留なされませぬぞ、不忠不孝とのはさげすみ、今更ナラス詫もな
 く、せめてハ母のお心よさからぬが寸志の孝、四海の内の此光秀が掌
 よ有る、ふとめナ其儘く、^{ミササギ}道ハ惡人程有て根強い魂、云ん方なき
 人外めどよらむ目元よはらくと涙かくして立出る、心のはり弓強弓
 の引ぞ、煩ふ嫁孫の中よ悲しき初菊が、是のふナ祖母様と扣へる手先ふ
 り拂ひ、見返りもせず出て行はつと泣き出す人々を、制しとゞめて、^{ヤア}
 者共、母人の行衛いづく迄も見届けよ、^{ミタ}手道具の用意くと光秀が
 鶴の一聲あまたの軍卒、^{たんす}筆笥長持、狹箱、其外雜具、銀乗物、^{ミタ}母公様のお姿
 を見失ふなど足早よ跡を玄たふて急き行、影見送りて光秀、何角心よ
 打うなづき、奥操舟重次郎、嫁初菊諸とも次へ立ちやれ、用事あらバ手を
 喚すと、心有げな詞のはし、^ナといへど立兼る、^{ヤア}とくとくと何を猶豫

早く立よときめ付けられ、心ハ跡々残れ共親子三人打連て是非なく次
入相の鐘が無常を告渡る。實物凄き庭の面、忍び出たる四王天、主君の
様子いかゞと身を潛めてぞ覗ひる。夫といしらぬ光秀が有合硯引
寄て筆くいゑめし唐紙の表々何やらさら／＼かくと見るゝ重次郎。
瞬もせず物陰々守りゐる共、白書院只一心と書認め、筆授捨てむんづと
座し諸肌窓げ指添を、拔や玉ちる氷の刃や打詠め兩眼々はら／＼涙
くいしべり、既と斯よと見へければ、主從小影を走り出、や早まり給ふな
父上と、取付く重次郎四王天鏡の如き兩眼を、くわつと見開き聲震はし
我君、こなた狂氣召れたの、今朝より始終の様子、心得がたく思ふ故、萬
事心を付る某、物陰々窺へば、出し顔々辭世の一匁、順逆二門なし、大道心
深々徹す五十五年の夢覺來て、一元々歸すとい何のたゞ言、君臣を見る
事塵芥の如くせば、臣君を見る事怨敵の如しと、春長猛威々增長して、神

社佛閣を焼失し萬民の苦しむる暴惡、神明是を誅するよ、光秀の手をもつて討し給ふ天の與ふるを取らざれば災ひ其身よ歸す、左程の事をやさず共よくは合點のこなた様切腹との馬鹿／＼しい人はしらず此四王天田島頭殺す事罷ならぬと居丈高同、そふ亥やく父の命は我よ始万卒同よ至る迄は一身よ及ぶは命臣義を守る共君是を補助せざれり、大將とはゆされず只生害同いどより給ひ下万民の苦しみを救ひ給へと右左り涙と俱よ諫めの詞、光秀はたと横手を打々誤つたりく、一天の君の爲みは惜からざりし此命暫同しながらへ事を計らん先の繪旨を乞受て猶も背かん者共を悉く誅戮せん急き是か我は參内汝ら二人は久吉が都へ登るを半途よ待受、一戦よばつ返せよ^テ裝束をと立上がれば近習小性が心得て運ぶ大紋立ゑぼし立派よ着なす骨柄同邊り輝く其粧ひ早引出す栗毛の駒、光秀ゆらりと打乗てまく重次郎同田島頭

諸共々西國へ馳向ひ必共々油斷なく軍功を顯へせよと詞みはつと四
王天^{てん}、君御出陣^{しゆしゆ}及はず共某彼地^{ほぢ}向ひなば猿冠者^{さるくわんじや}めが素頭^{すかう}を討
取るハ手裏^{しゅり}又有^{アリ}イテ彼も知れ物定^めて遠き計畧^{ごりょう}有らん^{コト}親人の詞共覺
へず父^{おや}とかはつて某が軍配^{はい}取て一戦^一は敵の首を質^{しつ}檢^{けん}よ備へん^{コレ}氣づ
かひ有な^ド勇みすしみし我子の骨柄^{こうがら}天晴^{てんせい}潔^{きよ}よし我も跡^{あと}出陣
と手綱^{てぬい}かいくりしとく^ク乗出す駿足馬上の達者^{たつしゃくわ}轡^{むく}の音ハ秋の野の虫
よハ有でりんく^く綸旨^{るんし}をやがて頭^{かぶ}よ戴き刃向^{むか}ひ原打立て追立
切りちらし追付け四海^{よこ}よ葉^はを伸ん^のいそふれやつといつさんよ大内山
へぞ急^{いそ}き行

○七日の段

接化隨緣眞實^{まこと}無量^{むりょう}の恵み渡^{わた}され共佛敵猛威^{もうゐ}の春長^{しゅんじやう}世を狹められ
鱗重成^{りんじゆじやう}無念ながら杉の恭^{そよ}裝^{まと}をかまへゆ^ゆしくも寄手^{よせ}を防ぐ唯一心

矢叫びの音響の聲天地よ満て動搖せりかゝるけりしき其中より媚きつたふ姫共軍よ馴て氣ハ張弓襷鉢巻腰刀追ゆし身の備へ中よ小鎧が才發顔ヤのふ浪江何とア騒がしい世界でハないかいの切たくと切つはつしを世渡りよまだ仕たらいで春長殿慶覺様を相人よ取り憎てらしい軍事、イカ追付け如來様の罰が當り首がころりと飛であろといへバ兵卒口よみ、チヤ飛ともく一向一心にかたまつたる我よ殊更主人喜多頭様の軍配石山よおいても度の勝軍、モ負る事ハ肯ニよもない事殘多いハ王様のほ挨拶あたまの役でおどなししく丸ふ納めて慶覺様が石山の砦を引拂ひ此杉の森へ沿陣がへしやうこりもなく又寄せかけた尾田の大軍、ひとつ寄ても不可思議光如來のお力よや叶ひませぬじやないかいなあいなあいな。ナット待つたり叶ハぬ次手よといどしいハ若旦那孫市様、尾田と和睦が破れた計よほ使の越度じやと鎧

は様のほ勘當、何と可内、ほ訖の願ひを一統み、玄て見る心はないかいや
いと、おろく、涙惣おもがすゝり上たる水涕なみだも、忠義のはしと殊勝也、斯と
もれ聞く一間まつ、孫市が妻の雪の谷、我子の手を引きしとやかみ出る姿
もおのづから、思ひ有る身の打しほれほんまことに主なり家來なりと、思ふて
儀しいそち達こよなづが志こころざし、聞く嬉しさといど、猶、悲しき夫のふ身の末と
なる事と自が、心の内を推量してたもやいのふと有りければ、姫始士卒
共、顔見合せて詞なし、娘松代の母の顔、打諭あわせめく、ニレヤ母様おまへは何
をむつかるぞ、同玄様うきら様も皆迄も何を泣なきやる、早ふとと様や弟の重若を
呼まして來てくれやい、此間の清書をお目めみかけて、譽ほめてもらいたいわ
いのふさ、譽ほめてもらひたからふ、そなたより此母が逢たさまつ山々さんさん暫しばしが
間まも母の傍そば得放ゆきぬわの重若、定めて泣なきてばつかりゐるで有あ、かはいの
者やとくいしばり、泣音なきごゑを包いむ雪の谷が心の内うちぞ、せつなけれ、襖ふつのあな

たよ重成が高らかよ歎拂ひ、扱ひ舅君のお出なるぞと、いふよ心得姫が、席を下れば雜兵共地よ鼻付けてかつ跪ひ待間程なく悠然と立出る。驥喜多頭不興氣よあたりを見廻し、四女原此所よ用事はない次へ立ち、軍卒共も何をうつかり要害こうがいを頼みよ搦手からめての守り怠るおこなる一大事、早くまはつて心を付けよ、行けくくとおつ立やり、四嫁女、そなたよも云聞かし、悦ばす事が有ぞや、ア私に悦ばす事が有ア意遊まわす、夫孫市殿の、アテ扱あつ、又しても不吉者の悴が事、左様な事でおりない、當月二日の曉あかつきよ天文の考かんがみし所、東よ當つて白氣自然しぜんと立たつ登のぼる、是則敵の大將、春長が腹身はらみと頼む勇者の内よ變心へんしんの者有て、事をやぶるの前表まへひょう、今日迄口外かくわいせざれ共數日すうじつの籠城ろうじゆ、お身も定て心勞ころひると思ふから、安堵あんどさせん爲ためア聞す、見よく追付世ひづよのを廣ひろく、足利の正統せいとうたる慶覺けいがく君の後代こうだいとなさん、何と此上もなき悦びでアおりないかと、未前まへを察す明智の眼力、こなたは一途いつよ夫

思ひよき振からとすり寄て、^キもふお嬉しい段ぢやござりませぬ。がど
ふぞ成ふ事なら、其白氣とやらが立ちましたが、孫市殿の^ハ勘當がゆり
ますといふしらせなら、ほんよとの様^ハ嬉しう存ぢませうぞ。憚りなが
ら慶覺様と^ハ一所^ハどふぞ世^ハ出られます様^ハ、親^ハの^ハお玄ひお情で
と、いふを打けし^トまだしつこい、かゝるめで度折から^ト、よしなきたれ
言聞きたくない、お身も孫^ハ連て部屋へ行きやれ、何をぐすく、早く
立ちやれとかみ付られ、何とせん方^ハ投首^シ娘公代を伴ひて、しほく立
て入^スける、跡^ハ重成只一人立上つて通路の鉤引ならせバ一間の^ハ簾
さつと小性がかゝぐれば、念珠^{じゅ}他事なき慶覺君、重成が音づれ何事か有
やらんと、仰^ハはつと頭^{かぶ}を上^ハ、今朝^{たう}^モ機嫌^{きげん}を竊^{うか}ひ奉^{うけ}らんと存^すれ共、敵
の朝^{たう}がけ短兵急^べよ寄^{かづ}かれバ軍配^{さうばい}よ暇^{ひま}なく、一泡^{あわせ}味方^{せうが}の勝利、攻口^{こうぐ}を
退^{しりぞ}きし^ハへば、一息の間^と漸^{やき}只今^ハ前^{まへ}へ伺^{うけ}公^{こう}不禮^{ふれい}の段^ハ高免^{たかめん}と敬^{うやま}ひ、深

く述ければ誠忠俊父の一人時々合ねり、此程々の心勞推察せり、兄義輝
君の三好松永が爲み亡び給ひ、今又我の春長が爲み斯のとしよしなき
命ながらへて萬民士庶の苦しみと云ひ、諸卒の命を失へんより、早く我
一命を斷、萬死を救ひ得させよど、目を閉て稱名を唱へ給へば重成も
君の惠のみ有がた涙、胸のみおさへて氣色をかへ、云かいなき仰、夫れ軍
の和み有て衆のみあらず、馬洗廐養等しき尾田の弱兵何程の事や有ん
凱歌を上る瞬く内、君のみしろし召如く、國大なるといへ共戦ひを好
めば必ず亡ふと近くの武田勝頼、父信玄迄其威隣國ならぬ者なく猛虎の如く、諸侯も恐れしへ共勇みほこり、武のみ慢じたる太郎勝頼、累代の
武名も一時のみ朽ぬ、春長辻も先其如く、心弱くて叶ひじといはめやせ
べ慶覺法師、打うなづかせ給ひつゝ、重成來れども座をば立せ給へる其
所へ、大息ついて鷲森八郎、注進と手を突くべ、人といふかと仰の下され

ばし軍は味方の勝利なれ共、力責せきみは叶はじと、數千の軍よ燒草を積乘て櫓やぐらくの其下へ、山の如くよ積重ね、たゞ燒打やけうちと云せも立す、喜多頭はつたとねめ付け調あは馬鹿ばかくしい何のたは言、其かれ刈柴かりしばこそ身がヤ付ける一つの計策けいさく、ほ大將のほ前なるぞ鹿忽しかのの注進しゆしん、早く立てとわざと怒りの一言もしらで、鷺森八郎は、拍子ぬけく引かへせば、いざほ入と八方よ心を配る重成が、底意そこひをくみて慶覺君奥殿おくとのとして入給ふ、夏の日の長きも我を鬱むなる、物思へとや夕暮の、空を待けり孫市が肩かたよしつかり鎧櫃よろひびつ、人目を恐ぶ陣笠の、歩よやつしたる佛は、昔よかはる勘當かたとうの、身は猶更よ心の隔、何とせんかた切戸口ねど、イむ、こなたの茂みもみを忍び出たる大の男あたりうそく、覗うかひ足、奥を目がけて忍び行、後の方を、孫市が、曲者やらぬと腰おしをむんづと組で引戻すひも、ちよこ才さいすなと振ほどき、直ただよ拔討ち刃の光り、かいくいつて抜合はし手練しゅれんの切先はつしく、打合刃音

何事と手燭片手立出る雪の谷、火影を覆ひ物陰息を詰てぞ守り居る庭。又は二人が上段、下段、飛鳥の衝き孫市が難なく曲者切倒しのつかしつて、とくめの刀、血押拭ひ刀を鞘納る丈夫死骸の懷中、探る手先と取出す一書、捌へと月とすかし見て。當月三日又春長父子、光秀が爲み亡びしと、心地よや嬉しやと悦び勇む後には、紛ふ方なき夫の聲、飛立計走り寄。邊たかつたと縋り付嬉し涙だ先立てり、夫も遠夫婦の愛情やし打うるむ目をしべたしき。誠や飽ぬ夫婦が銘より、躬を連て思はぬ離別父の勘氣を蒙りしも、暴惡非道の尾田春長、約を變せし故なれば、何卒きやつが首討取り親人の實檢と備へなべ、勘當詫の綱もと心りやたけよはやれ共慄重若召連ては、足手纏ひと未練も子も引されて送る月日、鉄炮疵みて脚さへも思ふと任せぬ騎人者、武運盡し我身の上せめてほ主君親人のお役と立て死ん物と覺悟極る今日只今死後と頼

むの二人の子供、心得たるかと夫の詞、聞み女房が泣出す。其口押へて、^{ヨリ}
親人のお耳入らば返つて坊^{ぼう}、^ヂ悴^{すく}を手渡しと、かたへに直せし鎧櫃、
蓋^{ふた}取退^のれば重若が、かし様のふと走り出縋^{よが}り歎^{なげ}け、母親も胸^{むね}涙の溝^{こう}
沙^さの引くや血脉^{ちあせ}と奥よりも姉の松代が聲聞付^け、おとし様のお歸^きりか、
重若も戻つて嬉^{うれ}しいく、早ふ遊^{まわ}と手をたしき悦^えぶ姉弟雪の谷が、
膝^{ひざ}み引寄せ聲^{こゑ}疊^{かね}らせ^{まわ}、嬉^{うれ}しかろく、何^{なん}ばふ其様^よ悦^えびやつてもの、久
しぶりでお目^めみかしつたとし様は、腹^{はら}を切ねはならぬといのふ、^{ヨシ}孫市
殿、是を見てかいのふ、何^{なん}も忘^ならぬ二人の子供、お前は可愛^{かわ}いござんせ
ぬか、此姉弟^{おとど}をふり向けて、死^しる覺悟^{かくご}を極^{きわ}たどり、餘^{あん}り氣強^{づよ}い胴欲^{どうよく}な、武士
が立ても捨^すつても、死^しさぬく、死^しさぬと、かきくどくのも、忍^{しの}び音^{おと}と奥へ、
憚^はるうき涙^{なみだ}、道理^{ぢの}としれど聲^{こゑ}と角立^{すつ}、未練至極^{しじき}の其ほへ頬弓矢取身の
切腹^{くつぱ}の此身の本懷^{ほんがい}、今計らずも寄手の大將^{おとど}、是^{これ}角六郎を討^うて捨^す、懷中の一

書を見れば、都本能寺よりて春長父子、光秀が爲め討死と、春孝の玄
らせの密書、此騒動より寄手の奴原、一旦圍みへ開く共再び寄せんに必定
たり、危急を救ふは此孫市、君と父との命よりかへり、首を則ち久吉が陣所
より送り和を乞へ、元より寛仁大度の眞柴、よもや違背へ致すまじ使へ
憚重若丸、兼て認め置たる一書、斯迄思ひ込んだる某、妨げなす不所存者。
二人の子供爰へこよ、兄弟ともよどしが子か又母が子か云て聞かざ
ば賢ひ者と、撫つさすりつ尋るも、胸より無量の思ひ有、心よりしらで弟の重若
かとし様、わしひお前の子でござるれいの、何亥やどしが子亥や、よく
云た出かしたなあ、サ姉の松代などふ亥やくと、問ど年だけうぢく
と母より氣兼の言兼れべ、返事のないは嘆が子か、我子でなくば出てう
せうと、呵り付けられ泣くも何のか、様の子亥やござりませぬ、ど
様の子でござります、そちも我子とな、よく云た出かしたなどしが

子ならべ、身が云い付る事背きそむせまい。親の云ふ事聞ぬ者は不孝者
矣やと。かゝ様が常つねからのお呵り、どんな事でも聞きますするのふ、重若
そなたも云ふ事聞きやるかや。又よふ云ふ事を聞くはいのふ。テ、扱てう
いやつ、然らばナ付る役目が有、今とシが此短刀たんとうを腹へ突立たらばなミ、
此刀と脇差わきざよて身が首を引切、此一書を添て久吉殿へ持參せば此上も
なき孝行者かうぎょくしゃ、合點がいたかと細やかよ、云教をきゆれば驚く母おやしみ付られ
くいしシべる親の心はしらぬ子の譯も七つ子重若丸じゅうじやくまる、そんならとシ様の
首を此脇差で切き、孝行こうぎょうになりますかや、なる共とも、日本一の大孝心
姉様あねさまも合點かや。ナア早ふ腹切はらきりて下されど、いふよたまらず母親が我子
引退ひきどり、忌いましい子供こどもでハ有ハいのふ、コレ孫市殿まごいちだん、いかよ望まねが立たたい逆何
辨べんへない此子供こども、親を殺ころせと教きる人が又と世界よの有ハかいのふ、夫や
我子わがこを安穩あんじんよ置おきたい斗とうよとやかくと、心を盡す女房めらわうを思おもひぬ仕方情しほうじょうな

い親の別れも身の科も辨へしらぬ佛様、鬼よせうとは胴欲なせめて此子が生先を見届る迄生て居て下さりますが親の慈悲、頼むはいのと計みて譯も、詞も涙川膝ひざよ漲あふる風情なり風情益なき諄聞くわごとたくない三千世界より子を思ひぬ、親が有ふかうつけ者、左程躬おのよ此首を討たしがたく思ひなば、子供こどよかはつて介錯かじくせよ、サ夫おへ得心なくペ縁切えんせきふか、亥いやといふて是がこゝ未練至極の其ほへ頬ほ所詮介錯思ひも寄らず、見さげ果たる女めど、取て引寄せ、提緒さげをの早繩、庭木の杉すぎよ亥いつかりと結ふ妹脊めいせきの亂れ口、こがるも其身この梢こずの猿腸さるこうを斷はうき思ひ母の有様見るよりも二人の子供こどのふろくふろく顔こ、松代重若まつしろもどし様さまの兩の手て取り付て居ゐ、必ず放してたるものなど、あせれど夢か現ううなき夫おへ今を最期さいごぞと、諸肌膚しょはづペ弟の重若まつしろ様さまもふかや、テ今が親への孝行時ときと、言つて短刀たんとう我腹わらへぐつと立たつばはつと散ちるるから、紅くれひに目めくらみ心こころも消きゆる雪ゆきの谷だにが闇路やみじゆ

をたどる思ひみて正躰もなく伏沈む歎きの折も一間も船其刀引廻すな云ふ事有りと父重成志づくと立出、ホ適忠臣よくしたり今こそ勘當赦しくれる是を此世の思ひ出又心靜しづか又最期をとげよといふながら二人の孫親の死別も夢現、うゆき成人の其後の歎くで有ふ悔みからふと思へば不便彌増いよいよて我ハ老木の末近く便とするハ母の親、むごい祖父、おやと恨でばしくれるなよ我逆も骨肉の船を見殺す胸の内どの様又有ふと思ふぞいやいま、是非もなき次第やと胸又湯玉の湧返る親の思ひの有難涙見上見おろす一世の別れ手負の涙おしとゝめ、ホ有難き父の恵忠孝全まつたく望た足あぬ重若松代最前とシが付たる役目わざの只今さ早く、シ必ず切まい切たらば母があつしをすゆるぞやとおどせば遼子心こころひかゆる手先ヤツ詞ことば背くと子でないぞ、とも様の口用を聞とかじ様が呵らしやる其囁か様ひあの様ひえ縛しばられて居やつしやる、シ重若

かし様の、繩をといて上げてたもいのふ、夫れでもあの様よ白眼し
 やるもの、何ほど阿らしやつても大事ない、此繩をといてたもいのふ、
 ヤ舅様同様、胸見せすとなせとめて下さりませぬぞ、現在孫を親
 殺しよするが情かぢひかひのふ此繩をといて下されど、頼む嫁より頼ま
 るし、舅が胸の苦しさを、こたゆるつらさ、面々涙み増る思ひ也、斯てい
 果じと孫市、我子の腕先持添て、しつかと當ればぐはんせなくともよ
 力身で、どし様斯かや、そうぢや出かず、くも一世の別れ、一世の名残
 と雪の谷か消る間を待つ夫の命、神も佛もない事かと、亂るし心亂れ、髪
 血沙争ふ血の涙、上より父が稱名の聲、諸共よりんの音、慶覽君の他念な
 く南無あみだ佛、く、なむあみだ佛の回向の恩徳、廣大不思議みて往相
 回向の利益みて還相回向、互に入せり、聲の如來の迎ひなど、ゑいくく
 と孫市が首の前まで落みけり、わつと恐れて飛退子供、母の其儘打倒れ

前後不覺^か、泣^き叫^{さけ}、始終見届^け重成が目^み持つ涙押拭^{ひふ}、生者必滅^{じやうか}
の理^り、今目の前^{まへ}見るも夢^{むめい}、せめて夫^の切首^{きくし}、暇乞^{ひまご}を立^たち上^あり、繩^と
きほどけ^べ雪^{ゆき}の谷^{いにしへ}、其儘^{そのまま}首^{くび}み付^き、覺悟^{悟かく}故^{ゆゑ}とは云^ひながら、いと
し可愛い^{おどろ}姉弟^{よの}、嘸^よや心^{こころ}が殘^{のこ}るであら、魂魄^{こんぱく}去^はらば、今一度、物^{もの}云^ひてたべ
孫市殿^{まごいちどの}我^わ夫^のふと押し動^{うご}かし、盡^{つく}ぬ名殘^{なまこ}の百千行^{ぎょう}、聲^{こゑ}を限^かり^よ泣^き叫^{さけ}べ
べ、其歎^{かな}きの理^りながら、主君^{しゆきん}へ忠死^{ちゆうし}の躬^{みこと}が功^{いざを}し出^だかしをつたと譽^{ほめ}そ
やす、親^{おやぢ}が心^{こころ}を推量^{すいりよう}せよ、不便^{ふべん}と斗^{とう}り詞數^{ことの}、云^ひぬ心^{こころ}のせつな^さを思^ひやつ
たる雪^{ゆき}の谷^{いにしへ}が正体^{せいたい}涙^{なみだ}の聲^{こゑ}を上げ、家^{いえ}を忘^{はず}れ身^みを忘^{はず}れ討死^{うめし}する^べ、武士^{ぶし}の
習^{なら}ひと覺悟^{悟かく}しながらも、得^{あきらめ}諦^{あきらめ}ぬ^べ女^{めの}だけお敵^{てき}しなされて下^さりませ、長^{あが}い別れと^{おさらぬ}子^この常^{じょう}の遊び^{あそ}か何^{なん}ぞの様^{よう}に、親^{おやぢ}の首^{くび}をバむごらし^いい切^き
が手柄^{てがら}み成^なるといふ歎^{かな}きの外^{ほか}情^{じやう}ない、かかる宿世^{すくせ}の報^{むくし}ひどくどき
立てたる恩愛^{おんさい}の心^{こころ}はひとつ重成^{まつた}も瞬^{しば}き繁くばらく、涙^{なみだ}の雨^{あめ}か夕^{ゆふ}雨^{あめ}

の車軸を飛す如く也折しも吹來る風よ連れ響く貝鐘責鼓又も敵や寄くるかと驚く雪の谷騒がぬ老人思ひがけなくかしこより足利の正統たる慶覺君を以て迎ひの爲中川清秀參上せりと呼へりく入來る清秀喜多頭へくへつとせき立ち開和議を破りし無道の春長其祿を喰中川瀬平納過ぎたる上下衣服以て迎ひどり何のたは言、一旦の憤り尤至極此度の合戦に舍弟春孝殿事を計りし禮を亂す去よよつて眞柴久吉内意をもつて立越し密々都へ供奉せん爲早御用意と云せも立交逆賊光秀が爲よ自殺せし春長父子知るまいと思ふかや石山方よ名を得たる鱸喜多頭重成眼の日月及べぬ事をときめ付くれば清秀猶も詞をつくし成程推量の如く當月二日都本能寺よおるて主君の横死愁ひ沈む我々僞りの有るべきや取分け子息孫市殿死を以て久吉殿へ願ひの一條今より一子重若丸父の忠義を頭よ戴き二代の鱸孫市と名も

改る兩家の和睦慶覺君のほ本願照すも法の道廣くやがて目出たき榮
へをと情の詞よ疑念も散じ、誤つたりく、个程厚志の眞柴中川船が
願ひ我君の法の門出一時よ開け此上もなき我悦び、レく嫁女、孫が手柄
は二代の忠臣歎きの中の悦びと舅の詞聞よ付け、いとゞ涙よ雪の谷が
いらへも更よ泣、早に立の刻限と追ふ、警固の諸軍勢見るより重成手
を打て、万事よ馴し清秀殿、我君へ此様子ナ上んと立上がれべ、や開迄
もなし、とくろ慶覺是よ有ると、立づくと立出給へば、はつと恐るゝ二
人の勇士、慶覺君ハ、衣の袖えぼりたまひていかよ、旁孫市が忠死よよ
り万死を出しも佛の恵み久吉が情の計ひ又清秀とやらんが志し過分
至極とのたまへべ、清秀なをも敬ひ深く、有がたき君のほ謹此上へほ
心置きなく早鶴鳴よ程近し、いざほ發駕とすしめよ君り、おり立給へば、
暫くほ門出を壽きの孫めが一さし、ほ上覽よ入れ奉らん、嫁女常よ歛

し扇の一手早く、くと勇の詞、涙ながらみ取上ぐる鼓のしらべ、重若
が祖父様、謠をうたふてやと扇を玄やんと、身の備へ、あら目出たや末廣
の君の築さかへは万まこと歳せと祝しけり、拍子ひしよつれて稚子わらわのかなで祝する末
廣の其一曲は末の世よのよのと名をといめたる鱸すじきがふどり、因縁斯そぞろとしられた
り、いざは立ちと清秀が、詞ことわみくり出す行列けいれつの、おさへは二代の鱸孫市、武
士の鑑かがみとなる鐘の音ねもろどもよあけて行、夜もしらくと白鷺しらさぎの森を
はなれて、飛びこふも、君のさかへを白鳥の神の應護おうごと勇いさみ立ち都の空
へと供奉くふうしけり

○同八日の段

あはれむべし、英雄の武將刃の霜と消て行く、内大臣春長公けふ一七日
の大法事と老若男女わかつなく、參詣群集さんじゆぐんしゆを當あたとして見せ物、輕業力持
戦國の世も下さの身過よかはりなかりける所の百姓引連てのさく

来る陣張甚助、茶やが床凡^{しやう}と腰打かけ^{こしき}、庄や太郎作とやら、此度尾田春長の法事^の、主人武智左馬^の介様の^の差圖^の、情を以て萬事^の宥免^{ゆめん}有れば、付上^のがりのした百姓^其誰が赦して、輕業^亥やの^{ニヤ}曲持^{きょくじ}のと仰^{さかづ}しいふるまい、外^ハ格別^の當村^ハ此陣張甚助が支配^{しはい}立ふとふせふと身共次第^の小家^{がけ}茶や^ミ至る迄^{ヨリ}、今日中^ミ取拂^{へど}主の威光^{るくわう}と肩ひぢはり、さも大へいよ罵^{ののし}れべ、庄や太郎作あたまをかき、其お腹立^ハ尤^モでござりますれど、又しても^く、^{エイ}くわあで村^{より}亂^{らん}が騒^{ざわざ}此頃武智光秀様^の將軍とやら^ムお成りなされ、少しこちら近邊^ハ穩^{おだやか}其悦びの參詣群集^の、せめて四五日^の用捨^をと、言つて腰の早道^を、取出す小錢茶碗^{みうつし}、^マお一つと差出せば、手^ミ取り上て胸^{アキ}りし、^マおらんだ眼^{アシ}のどこへやら、くはらりとかはるからくり的^{ハハハ}何庄や^マ何かいやい主人光秀公^が天下を志るし召^ス、其^ハ悦びとあれば苦しみない^く、輕業成りと^{から}唐^の芝居なりと勝手

次第拙者元來茶が好だが、大腹にしてかへてくれる氣はないかと、肩からはへた、爪長代官百姓共の口揃へ何が揃く、なんばい成りとほ遠慮なし、かへなされて下さりませ、然らばどふぞ今一ぱい所望くと差出され、めいく紙入巾着をさらへて漸八分目、左少ながらと差出せば、是れ重きのほ馳走いやもふ此お茶さへ下さらば、少くの拙者の天窓で、土佐踊なされても苦しからず用事あらば承らん必心置れなど欲み目のないよこく一笑顔がほしてやつたと百姓共、庄やを先に立上り又もやう意のかはらぬ内、代官様へ差上る、出端の錢をもふけふと挨拶そこと、立歸る、跡み甚助只一人くゆらす、煙草のけふりより胸み思ひのたへ間なき、おこぶの後、もぢくうちく、うちく、ドリマからふと立上り歩みかゝればこらへ兼かねやくと呼かくれば、甚助あたりを見廻して、かた心得ぬ、柳の小陰こかげをやくと呼かける、夜たかさんかいな、ティナあいなと走

り出はづかしそふに縋り付、いはんとすれど赤らむ顔、甚助いためつす
がめつ、おこぶが姿を眺め入り、見れば本内の仕事盛り、身共よ取付きこ
だれる、子細ぞあらん物語れ、ついよまみへぬげんさい殿といひれて
漸顔を上^上_開、ついよ見ぬとひ聞へませぬ去年のさつきの夕まぐれ、道頓
堀のなら茶やで、思ひ初たが縁のはし、丸寐のぼんや、丸清の二かい千
年も萬年も、かららぬ契り龜竹のふし、迄がなへる程、心よかつた床
の海音^{いきし}く、岸本や人の噂^{うわさ}、鳴戸やをほんよ嬉しの森新で、わし
や悦んでゐる物を、夫よおまへりあげ物やの荷箱^{にばこ}か大正の鰻^{うなぎ}の様^{よう}、ぬ
らくらとしたぬめた様、忘れるどり餘りな、聞へぬわいなど取り付て
恨の尺^{なすび}をくどき立て、すしり上げたる有様^{いだる}の達摩^{だつま}の畫像^{ゑぞう}、のら猫^{ねこ}のそ
ばへかしりし如く也、甚助道理と脊撫^{せきぶ}さすり、一ゝ心^{こころ}よ覺^{おぼ}の合紋^{あわじ}、顔見忘
れたる悪るかつた、幸ひおれも徒然^{とがん}の砌^{いさ}、水茶やへ、お玄やと、いれ

ておこぶもぞつくく、渡りよ船と帆柱はばしらをかゝへて戀の港入打つれ立て歩み行流るゝ水の音さへも、物騒さわがしき戰國せんごよ行儀亂おふらさぬ、生立おだてり、武智ぶぢが一子重次郎人目ひとめを忍ぶ深編笠あひがさ松原傳まつばらひよ歩み來て、有合床几ゆうごくとうぎよ腰打かけく思ひ廻せば恐ろしき世の亂みだれきのふの君臣くみんひけふの怨敵親おんてきしんい子こを討ち子この親おやし、刃のを合す修羅しゆらの巷ちまたせひもなき世の有様ありさまと暫し思おもひ惱おもひけり、漸心取直し、父光秀ひかりひでが刃のよかしり空からしくならせ給ふたる春長公はるながの靈前れいぜん御許容ごゆうゆうなく共後世ごこうせいの爲ためイテ拜せんとさしかかる道みちをさへざる陣張じんぱう甚助じんすけ家來引具ひきぐし大音上だいおんじょう主殺おもひししの武智ぶぢが憚おのづかそこ動うごくなうぬが家來いえと偽うつわし某それがしこそ眞柴方ましば久吉くよし様さまへの奉公始はじ腕うでを廻せとひしめけば、久吉方くよしへうら切りの二た股ふたまた武士士の甚助じんすけめ、腕立うでたてして怪我けがまくるなど、臥立うつたて取とて身構みがへたり、ちよこざいな小わつぱめ物ものないせす討取とうとりといふを早く一同どうじょうよ切きてかしりし刃のの稻いなづま、暫ときし時ときをぞ移うつしける、いらつ

て切り込こむ甚助が刃物からりと打落し、付入るさそく重次郎、切伏くわくと
いめの刀、相人なけれど是迄と衣紋、つくろい刀を鞘納る不敵の重次郎。
是より直すれば、様の御隠居所へ發足はつそくし、此身の出陣お願ひす、敵のやつ原
かけ立、なぎ立て寄手よてを惱うなまし骸かばねの修羅しゆらの巷ちまたよさらし、武士の本意を達
せんと勇立たる若木の花、あたら盛りの春も見ず憂を都の假住居跡すみぐよ
見なして

○尾九郎の段

徳きくの答こたえ、勝ち仁けいじんの凶邪けいじやを除のぞくとかやされ、ま眞柴久吉中國の大敵を
攻討さあんと水をもつて手をぬらさず忽たゞち和睦わ相調ひび、大物だいものの浦うらよ着陣有
り武名の程なまぞ類たぐひなき、加藤正清進あさのみ出あ、信長おのなと云い鬼きの再來さいらいと、おぢ恐れ
し春長公かみながを討取うりつたる逆賊ぎやくぞくの武智光秀たけちこうしゅ、一時ひとときも早く都とよ賣入りうり、ひねり
殺ころすが君きみへ追善ついぜん、早御用意はやごようめいとせり立たつれば、久吉莞爾くわんじと打笑うちわひ、今いま又始はじぬ正

清が勇言ゆうげんチ、心地よしゝ去りながら此久吉中國こうごくより發向せば、都みやこより足を入れぬ内伏勢うちふせきを以て討取らんと、武智が結構顯然けつこうけんぜんたり、うかつに上京なすときへ過あやまちつて死地しちより入らん必油斷致しおとんじすなど、軍虛ぐんむよよりさとき久吉が詞ことわえあつと諸軍勢あらわち英智えいぢを感する斗也折ふしひよかく濱傳はまつたんひ、藁わらふご片手てより百姓長兵衛じょうびやくゑ旅僧りょそう一人引連れて岫くわし交まわくり行過る、軍兵共ともの聲こゑをかけやアく土民どみん坊主ぼうず真柴筑前守久吉様ひさよしさまの御前ごぜんとも憚おのづからすのさへりあるく横道わたり者扣くへからふと咎とがめられ、そんなら久吉様ひさよしさまのそこそこみござるか、お坊爰あらわ亥アリやとやいヤレ嬉うれしやく、一アタマぶくしませうと藁わらふごどつさり高たかあぐらアラくまだぞんざいなうじ虫ムカシめらムカシく其様そのようよけんよけんく云いんすな、久吉様ひさよしさまのお目めよかよかつたら、さつぱり譯わけが分わる物ものじやヤお坊ぼう成程左様せいじょう大坂今里村の長兵衛じょうびやく江州こうしゅうの觀音寺の僧そう献けん穴あなが參さんりまましたと、おつしやつて下さりませヤア長兵衛じょうびやくでもけれど穴あなでも對面たいめんなさる用事うようい

ないきりく立てと争ふ軍卒眞柴久吉御聲かけ某よ對面せんとひ子
細ぞ有ん是へ通せと仰バッと恐れて兩人を君のほ前よいざなへば久
吉二人を見下し給ひ終詞見馴されぬ其方達子細いかみと有りければバ、
扱も物覺のわるいお人わたしを見違へてござるかいのシ、いつやら
の事で有た今川とやら庭訓てぶきんとやらいふ大將おほせしゆ負さつしやつて春長様かすがじょ
と二人連でこちの内へ逃げ込しあつたを、お世話よしすた今里の長兵衛で
ござりますいのいの愚僧ぐそうの前方江州の山寺觀音寺の住職致しめり
ました時岸田村の百姓の息子岸田太吉といふ者を私が小性こまとして置
きました時ときあなたがお立寄り遊ばしまし其小性こまに茶を汲くじたら
お目めとまり奇麗きれいな小性こまじやこちへおこせとおつしやる故、二言にごんとな
しよ若衆わがみを獻けんじた献穴けんあなとヤ者様子有て只今いま今里村いまざとむらは佉わ住居すみよ餘りか
なつかしいやら又またお願ねがひの筋すじも有り、わざく是なる長兵衛殿ながひょうえんだんと同

道で參りしと、高座馴たるしら聲はり上げ、汗押拭ひ語りける、久吉の打
 うなづき、感釋聞べ。一見の有る事、兩人とも無事で重疊シテ我達が願ひ
 の筋ティヤ^同外でもござりませぬ、知ての通り本能寺で春長様をころりと
 云した武智光秀、きのふからおらが在所へ陣を取先手の衆の京街道より
 出張してお前様を殺すとの謀事憎ハシモトさも憎し、お馴染の前様武智ミツも討
 すの殘念など此お坊との噛合、そこでおらが一生又ない智恵を震ひ
 出し、お前様をろつとおらが在所へ連て逝レバシで、思ひがけなく光秀めをこ
 ろりと云してこまそふとわざく迎ひよ來ましてござんす、サク一時も
 早ふ用意して武智を討取る魂膽コンダンさしやませほんよまた忘た事が有る
 い久しうりでお目よかゝつた土産ミタケは是と藁ふごとてく取出す
 瓜二つカボ^同是のふらがあけ地カツカツよ出來た真瓜うり、切てあがつて下さりませ
 ど、自慢ミサンらしげよさし出せば、明地アキラカよ出來しを切て喰ミどり幸先よし

満足く、殊更汝が光秀を手引して討せんとい天晴忠臣出かしたく
恩賞褒美おんしやうめいの兩人共、望み任せ得さすべしと仰み悦ぶ兩人より、勝色見す
る味方のどよみ、皆勢いきほひを添みける、かゝる折しもかたへみならふいな
村方むらかた、聞きを作つて武智の軍卒、久吉やらぬと切てかかれ、加藤正清こうとうち
よこ才そだなあぶ蠅はぶ共、目み物見せんと大太刀拔て切りかくるを、受つ流し
て亂軍の、互み鎧よろいを削り合、濱手の方へ戦ひ行、兩人の立つ居つ、こりや名
らい大騒動怪家おどろきやのない内久吉様さくござれと先み立、歩む兩人明智の
久吉出行僧を引戻し、ぐつと一しみかたへみ投退とうたいけ百姓長兵衛じょうへといわ偽うそ
り、誠は武智光秀の舊臣きゅう 臣四王天田島頭てうといまれやつと聲こゑかけられ頭巾かみじん
かなぐりやつと誂あわせかけ、遅おその久吉よく察さした、うぬを偽うそりおびき寄せ討
取とえと計りしよ、見顯あらわされて殘念しやうなん至極しじきといふと早く薙わらづとよ隠せし
業物拔放わげきし、久吉目がけ切付きりつけくれり、返もどすなど軍兵共むぎやう群ぐんり寄て突つかく

る、鎌の穂先へしの薄、なぎ立て／＼切結ぶ勇猛不敵の四王天、乾達婆王の荒れたる如く突伏せ切伏せかけ上れば、あしらひ兼たる眞柴方胴を失ふて見へよける、久吉も心を配り味方の勝利覺束なしと、有合ふ僧の袈裟衣手早よ取て我身よ着し、馬よひらりと飛乗て、濱手の方へ只一騎欠出す向ふへ四王天、夫と見るちくり出す積先得たりとかわし一さんみ駒を早めてかけり行、さきたなし返せ猿冠者めと跡を、したふて、退て行、田畠あせ道嫌ひなく追かけ追詰四王天額よ無念の息煙立て勢ひ込んでかけ廻る遙、夫と加藤正清踊上つて田島頭、觀念せよと切込太刀、心得たりと渡り合、双方劣ぬ猛猛力火花を散して戦ひしが、いらつて打込正清が凡人ならぬ奇代の切先、あしらひ兼て四王天漂ふ所を切り伏せ／＼、主人の安否氣遣ひと跡よ見なして走り行、さしも勇氣の田島頭、數ヶ所の深手よろぼひ／＼、殘念や、斯迄手よ入る眞柴久吉討もらし

夫のみならずむざくと名有る勇者の首をも取らず討死するが口惜
やな、思ひ廻せば廻す程運の強き猿冠者め此土をはづれいつか又きや
つを討取期や有ん、無念くと云死よ、爰よ名のみを残したる田島頭が
身の果の哀なりける

○同十日の段

なむ妙法蓮華經、法の聲も媚きし尼が崎の片邊り、誰住む
家といふ顔も、かのが儘なる軒のつま、あたり近所の百姓共、茶碗片手み、
高唱しなふ婆様、こな様も見た所が、上方で歴々の御衆そふなが、何の爲
よ面白ふもない此在所へいござつたぞいの、よく甚作そりやいやんな
京の町へ武智といふ悪人が、春長様を殺して大騒動、大かた又下へ下つ
てゐやしやる久吉殿が戻つて来て、武智とは非よ一合戦なけりや濟ぬ
はいのふ、そんなら年寄へうかく京の町より居られぬとかくあぶな

げのないやうな在所へ來てゐるが大きく、時々近付がてら妙見講を勤るとよい手廻し、大きな馳走^{ちそく}と逢ました。是から隨分お互ふ心安ふいたしませう。^アく逝ふと口より云たい事をなくしけるやべり廻つて歸りける。老母^{おは}につとく門送り庭の千草^{せんそう}と打水^{うすい}もたもつ葉^は毎^{まい}、風薰^{かほる}る軒を目當てよくる人。武智^{むち}が閨^{ねり}と咲花^{さきばな}の操^{みさ}の前の家來を遠^{とお}ざけ、嫁の初菊伴^{はつぎくとも}と覗^{くわ}ふ。切戸の庭前^{にわ}と花と心を養^やふ老女^{おとめ}、夫れと見るよ手をつかへ、後室様^{うしやまよ}の身舞として、只今參上いたせしと懇懃^{いんいん}と相述る詞と老女の打ゑみ^{うち}、珍らしい嫁女孫嫁^{はなご}はるトの道よふこそ、去ながら涙光秀、當月二日本能寺^{ほんのうじ}とて主君を害せし無法者^{むふしゃ}、同じ館^{かた}と膝^{ひざ}ならぶるも、先祖の耻辱^{ちじゆ}身の汚れと、館を捨て此在所へ見退^{みだぞ}きし此妻^{こまご}を、見舞^{みまい}とふがましい、善^よもせよ惡^{あく}もせよ夫^おと付^つが女の道^{みち}、操^{みさ}の前の武智十兵衛光秀が妻、そなたの又孫の重次郎光慶^{こうじろう}が嫁でないか、

生死分らぬ戰場へ趣く夫を打捨て浮世を捨てた姑^{しょご}、孝行盡すは道が違
ふ妻城^{めいじょう}又留づて、留主を守るが肝要^{かんよう}ぞや、^まやもめ暮しの樂み^{たのし}みより、夕顔
棚^{たな}の下涼^{すず}捨べき物^{もの}ハ弓矢^{ゆき}ぞと、言放したる老女の一徹^{いつてつ}跡^{あと}ハ詞^{こと}もなかり
けり常の氣質^{きしつ}と、さからばすいか様後室様^{ごしそうよう}のふつしやる通り、此様^よ又只
お一人ござつたら、何もかも氣散じで、ア第一はお身の養生^{ようせい}、今から私も
初菊^{はつぎく}も後室様^{ごしそうよう}のわ傍^{そば}又居て、飯^{まい}も焚^{いた}たり茶^{ちゃ}も涌^わし、お宮仕^{みやつか}をせうぞいの
と有合前垂福^{だれうぢがけ}の上^う又引しめ茶釜^{ちゃふ}の傍^{そば}端^は香^{こう}の籠^{こも}る姑^{しょご}の、しぶく機嫌^{きげ}を
取兼る娘心^{むすめ}又初菊^{はつぎく}も、どふ濟事^{じじよ}か濁り井^{にご}の深き寄縁^{きえん}の釣瓶^{つるべ}、水くみ上
んと立寄れ^{たま}ば、^{コレ}嫁達^{よめ}シテ孫重次郎^{じゅうじろう}、城^{しろ}又残つて居召るかさればでござ
ります、重次郎が願ひより、どふぞけふの軍^{ぐん}又高名手柄^{かめうじやう}が顯^{あらわ}にしたい
と父上迄^{かみさき}の願ひしかど婆様^{ばばよう}のお赦^{ゆる}しなき^み出陣^{しゆちん}するも本意^{ほんいつ}でなし、母
又取次してくれとくれぐれ^{ぐれ}の願ひ故、餘り健氣^{けんげい}さ祖母様^{そぼよう}又機嫌^{きげ}の程

いかゞぞと窺ひよ參りましたと語る内、老母の涙をはらゝと流し、
うるさの嫁が物語り、主を討たる逆賊の邪、非道の軍の評定、聞がいやあ
の此住居又孫を譽るで、なけれども因縁悔んで返らず、戰場の事聞きたふない
武士が生れてくるどり是も因縁悔んで返らず、戰場の事聞きたふない
いやく、情なの浮世やと、無量の思ひ百八の數珠つまぐつて居たりけ
る折ふし表へ草鞋がけ、風呂敷脊せきといつきせき蛙かわ飛込道野邊の清水結
ばん夏の旅、西行もどきの僧一人門口もんこう立休らひ、諸國執行よゆげの一人旅、近
頃申兼たれど、宿の報謝ほうしゃ預りたし、押付けながらと云入れる聲を老
母が聞取て、見苦しうござりますれど、お心置なふに一宿、夫め千方百ひ、
左様ならば、遠慮なしよ免めんくと上り口腰打かくれば、二人の女、草
鞋くわの紐ひも解かくれば、勿體もつだいないく、構かまふて下さりますな、旅仕付けた
坊主の氣散じ、木納屋きぬやの隅すみでもついてころり、蚊屋かかしやも蒲團よどんも入ませぬ、お心

遁ひは無用と、詞半へ表口、人目を忍び只一騎、窺ひ立聞武智光秀、心得が
たき旅僧と、生垣押分けさし覗き、思ひず見合す母の顔、老母の何か心え
黙きうかづ、わしとした事が心の付かぬ、コレ出家様、此板園ばんえんひが則ち風呂場
水の幸汲こうくで有ついぼやくともやして暑い時分玄や行水して休んで
下さりませ、婆も跡で相伴しませう、夫よハ及びませねど相伴と有
べ涌おあしませう、そんなら免なされませど包引さげ氣散じよ湯殿ゆのをさ
して入よける、味方の軍卒兩手をつきつか子息重次郎、光慶様後室様ごうけい
願ひの筋有と、只今是へは越こり者共そち達たつ用事うじハない陣所へ早くと
鎧櫛よろこかき入させて打通り、こゝ者共そち達たつ用事うじハない陣所へ早くと
おつ立やり、異儀を正して兩手をつき、母様を以て、よ頼ひテせし出陣、よ
聞届下されなば、武士の本意と、重次郎思ひ込でぞ願ひける、老母の見る
お機嫌おきげん顔がほ、珍らしい重次郎、出陣の願ひとな伴を見限り此所へ身退き

しよ町^{てらまち}噂^{うわ}な願ひの筋最前嫁女^{みくわ}むしろ聞きました、連も出陣仕やる
なら、祖母^ばが願ひ此初菊^{はじぎく}、今宵^よ此家で祝言の盃^{さかずか}仕てから門出仕や、何と
嫁女^{めいじよ}嬉しいかと老の詞^{こと}も初菊^{はじぎく}、飛立斗氣^ともいそく、心の悦び穂^ほも出
る、顔は上氣^{きみ}の夏楓色^{なつもみいろ}も媚く斗也^と只默然と重次郎^{しげろう}けふ初陣^{はつぢん}と討死^{うめし}と覺
悟極めし此體^{このたい}、お暇乞^ごみ參りしと、しらせ給^{たま}ひぬ悲しやと涙呑^の込忍び泣
採^うの前も立上り、祖母様^{おやじさま}の機嫌^{きげ}のかはらぬ内^{うち}みかための盃^{さかずか}、それ、孫
も大かた心せき、採は九献^{くぎゆ}の用意^{ようび}仕や、重^{じゆう}次郎^{しげろう}が初陣^{はつぢん}の鎧^よの役^{くわ}ひすぐと
花嫁^{はなよめ}、三國一^{さんくに}の悲しみと、しらぬ白齒^{しらぬしらぐ}の孫嫁^{こねよめ}が、手を引連て、三人は奥^{おく}の一
間^{之間}へ入^いみけり、殘る^{のぞむ}薔薇^{ばら}の花一つ、水上かねし風情^{ふうけい}とて思案^{おも}、投首^{とうしゅ}しほる。
斗漸^{とうせん}涙押^{うめ}され母様^{おやじさま}にもばし様^{おも}も是今生の暇乞^{ひまご}此身の願ひ叶^{かな}ふた
れば、思ひ置事^{おもてご}更^{ふた}よなし、十八年が其間^{そのあいだ}恩^{おん}の海山^{かいざん}かへがたし、討死^{うめし}する
の武士の習ひと思し召分けられて、先立不孝^{ふこう}の歎^{なげ}してたべ、一つよひ又

初菊殿、まだ祝言の盃をせぬが互の身の仕合せ、わしが事へ思ひ切、他家へ縁付して下され、討死と聞ならばさこそ歎かん不便やと、孝と懲との思ひの海隔つ一間よ初菊が立聞涙轉び出わつと斗よ、泣出せばはつと驚き口よ手を當開、コレ聲が高い初菊殿、扱ハ様子を、ア残らず聞いておりました、夫の討死遊ばすを妻がしらいで何とせう、一世も三世も女夫玄やと思ふてゐる、情ない盃せぬが仕合せと、餘り聞へぬ光慶様、祝言さへも濟ぬ内討死との曲がない、わしや何ぼうでも殺しげせぬ、思ひ留つて給はれど縋り歎けば、コレなたも武士の娘じやないか、重次郎が討死の兼ての覺悟ばゝ様よ泣顔見せ、もし悟られたら未來永よ縁切ぞや、サアとかふ云ふ内時刻が延る、其鎧櫃爰へ、イ、早ふ、時、延る程不覺の元、聞分けないと呵られて、いどしい夫が討死の首途の物の具付るのがどふ急がるゝ物ぞいのと、泣く取出す緋威ひおきの鎧の袖よふりかしる、

雨か涙の母親へ、白木又土器白髪のぼし、長柄の銚子蝶花がた首途を祝ふのし昆^{こん}布結^{いと}ふり、親と小手脚當、六具かたむる三^ミ九度、此世の縁やわ
り小さね、猪首^{いのくび}よ着なす鎌形^{かまがた}の、あたりまばゆき出立^{で立ち}、爽^{さわやか}なりし、其骨柄^{どうがね}
、通武者^{つうぶしゃ}ふりいさま玄^{くろ}し、高名手柄を見る様な、祝言^{のめぐらし}と出陣をいつ玄^{くろ}
の盃^さ、^アく早ふ、目出たい^アく嫁^{むすめ}に寮^{しろう}と、悦^えふ程^{ほど}猶爾^{ゆゑ}増名残^{ます}、こんな殿^{どの}を
持ながら是が別れの盃かと、悲しさ隠す笑ひ顔隨分お手柄高名して、せ
めて今宵^{けい宵}、凱陣^{かいじん}をと、跡^{あと}得いわすくい玄^{くろ}べる、胸^{むね}ハ八千代の玉椿^{たまつば}ちり
て、ばかなき心根を察しやつたる重次郎包む涙の忍びの緒^{はじ}しほり、かね
たる斗也、哀を、爰^あみ、吹送る、風^{かぜ}が持くる攻太鼓^{こうたいく}、氣を取^とりなをしつゝ立上
り、いづれもさらばと云捨て、思ひ切たる鎧^よの袖行方^{しらす}成^なりけり、^ア
悲しやと泣入る初菊母^{はつぎく}も操^{みさす}も顔見合せば、^ア様嫁女可愛やあつたら武
士を、むさしく殺しよやりました、^ア初菊、重次郎が討死の出陣とい^ア知な

がらなま中留て主殺しの憂死耻をさらそふ。健氣な討死せん爲、祝言よそへて盃をさしたのひ暇乞やら二つより心残りのないやうと思ひ餘つた三々九度、ばゝが心のせつなさを推量仕やと斗みて、始て明す老母の節義聞初菊も母親も一度みどふと伏まろび前後不覺よ泣き叫ぶ襖押明け何氣なふつかく出る以前の旅僧たびそう、さうかみ様、風呂の湯がわきました、どなたぞおは入なされませど、いふよこなたの泣顔かくし、それには苦勞ながら年寄りよ新湯さらゆの毒跡ほとき若い女子共アマお先へ出家から、いかさま湯の辞義さぎの水とやら、左様ならばに遠慮なし、お先へ参ると立上れば、三人の涙押包奥の佛間と湯殿口入や月もる片庇ひだりひさし爰みかり取真柴垣、夕顔棚のこなたより顯あらわれ出たる武智光秀、必定久吉此内よ忍び居ること究竟くつきやう一尺一討と氣の張弓、心のやたけ敷垣ひきふきの見越の竹を引そぎ館小田の蛙かわの啼音きねをべどりめて歎さく悟さとられじと差足ぬき抜足

竊ひ寄、聞ゆる物音心得たりと突込手練の館先よわつと玉ぎる女の泣
聲、合點行すと引出す手負真柴よあらで眞實の母のさつきが七轉八倒
こゝ母人が死なしたり、殘念至極と斗みて、遠の武智も仰天し只忙然
たる斗也、聲聞付けてかけ出る操初菊諸共走出（シテ）母様か情ない此有様
何事と繩り歎けば目を見開き歎くまい／＼内大臣春長といふ主君
を害せし武智が一類斯成り果るゝ理の當然系圖正しき我家を逆賊非
道の名を穢す、不孝者共惡人共讐（シテ）がたなき人非人、不義の富貴の浮べる
雲、主君を討て高名顔天子將軍よ成た逆野末の小家の非人よもおとり
しとひしらざるか、主よ背かず親よつかへ仁義忠孝の道さへ立べ、もつ
そう飯の切米も百万石よまさるぞや、儕か心只一つで、ゑるしば目前是
を見よ、武士の命を斷刃も多いよ此様な引そぎ竹の猪突館、主を殺した
天罰の報ひの親よも此通りと、館の穂先よ手をかけてゑぐりくるしむ

氣丈の手負、妻へ涙よむせ返り、^レ見たまへ光秀殿、軍の道途かみでよくれん
もお諫めじやまゆた其時よ、思ひ留つて給はらべ、斯した歎きい有まいよ、じら
ぬ事どり云ながら現在母ほを手よかけて殺すといふれ何事ぞ、せめて
母ほのほ最期さいごよ善心ぜんじんよ立歸ると、たつた一言聞かしてたべ、拜むはいの
と手を合し、いさめつ泣つ一筋ひとすじよ夫を思ふ恨泣、操の鏡かがみくもりなき涙よ
誠あらはせり、光秀は聲あらしげ、^トちよこざいな諫言立、無益の舌の根
動かすな、意恨を重うへる尾田春長、勿論三代相恩の主君でなく、我諫わがことを用
ひずして神社佛閣じやくを破却はきやくし、惡逆日ぞうぎやくよ增長ちぢゅうすれば、武門のならひ天下
の爲討取たるハ我器量きりやう、武王ぶわの般ひんの紂ちう王を討、北條義時は帝を流し奉る、
和漢俱わがんよ無道の君をしむするハ、民を安むる英傑えいがくの志女童わらわの玄くろる事な
らず、すさりおらふと光秀が、一心變せぬ勇氣の眼色、取付島とりつけしまもなかりけ
り、折しも聞ゆる陣太鼓、耳をつらぬく金鼓きんぐの響きあいやと見やる表口、

數ヶ所の手疵ハタマツ又血は瀧津瀨たき、刀を杖ハシよろぼひく、立歸つたる武智が
一子、庭先テラマサ又大息つきアヒキ、親人是シテおはするやといふも苦しき斷末魔ミツマ、見る
よ驚く母親より、娘は傍ハタケ走り寄りのふいたいしや重次郎様ハシロジヤンばゝ様ハシロジヤンと
いひふ前迄此有様ハシロジヤンの情ない、お心懨ハラハラ持てたべやいのハシロジヤンと取り付て
介抱ハセハシ如在泣斗クモリトド、光秀わざと聲あらしげアラシゲ不覺ハラハラなり重次郎、子細ハシロジヤン何と、様
子ハシロジヤンいかハシロジヤン具ツヅカ語れと呼わればハシロジヤンばつと心を取直し、親人の差圖ハラハラ任せ
手勢すぐつて三千餘騎、濱手ハマハンドの方ハタケ陣所ハシロジヤンをかため、今や歸國ハラハラと相待所ハシロジヤン、
敵ハシロジヤンそれ共白浪ハシロジヤンの櫓ハシロジヤンを押切ハシロジヤンて陸地ハシロジヤンよ漕付ハシロジヤン追ハシロジヤン都ハシロジヤンへ馳ハシロジヤン登る、真柴ハシロジヤンの軍勢
ござんなれど、閥ハシロジヤンをつくつて味方の軍兵縱横無盡ハシロジヤン、なぎ立れば、不意を
打れて敵ハシロジヤン廢亡ハシロジヤン狼狽ハシロジヤン騒ぐを追立、追詰爰ハシロジヤンせんと戦ハシロジヤンふ内ハシロジヤン後ハシロジヤンの方ハタケ大
音上、真柴筑前守久吉の家臣加藤正清是シテ有、逆賊武智が小わつば共目
よ物見せてくれんすと、いふより早く太刀抜かざし、四角八面ハシロジヤン切り立

られ、瞬間^{またま}又味方の軍卒残らず討死仕り、無念ながらも只一騎立歸つて
ひど、息繼あへづ物語れべ、光秀怒りの髪逆立^{アゲテ}言がひなき味方のやつ
原^{シテ}四王天田島頭^ハ、さんひ四王天^ハ、目ざす^ハ久吉一人と、昨朝^{モテ}の一
騎がけ、亂軍なれば生死の程も、慥々^ハそれと承^ハらす、親人のは身の上心
よかよりひ故未練^ハ、も敵を切抜、是迄落延歸りしぞや、此所^ハ座有て
ハ危ふしく、一時も早く本國へ引取給へ、早く^ハと、深手を屈せず、^{アゲテ}
親を氣遣ふ孫の孝行心聞く、老母はせき兼て^{アレ}あれを聞きや嫁女、其身
の手疵は苦くもせず、極悪人の憚めを、大事^ハ思ふ孫が孝心^{アガ}、光秀子^ハ
不便^ハないか、可愛^ハ思はぬかやい、憎が心只一つで、いとし可愛の初
孫を忠と義心^ハ健氣成^ハ、討死でもさす事か、逆賊不道の名を穢^{ハガ}し、殺すば
何の因果ぞとせぐりくるしき老の身の、聲聞付て重次郎^{アゲテ}、そんならば
ト様^ハ生害遊^{ハシマガ}したか、今生のお暇乞、今一度お顔が見たけれども、

と目が見へぬ父上、母様初菊殿名殘惜やと手を取て、妹背の別れ愛着の道と引るといぢらしさ、母は涙と正体なく討死するも武士のならひとへど情ない十八年の春秋を刃の中と人となるいつ樂しみの隙もなふ弓矢の道と日をゆだね今朝の首途の其時も母様けふの初陣と遙高名手柄して父上やばや様と譽らるゝのが樂しみと、よつと笑ふた其顔がわしや幼よちら付いて得忘れぬとくどき立、くどき立つれば初菊もほんと恩へば此身程はかない者が世と有ふかとけてあふ夜のきぬとも永き名残の云号二世を結ぶの枕さへかはす間もなふ此様な悲しい別れをする事へどふした罪か情ない、わたしも一所と殺してたべ死たいわいなど身をもだへ互と手と手を取りかはし名残涙の暇乞見る又目もくれ心きへ母も老母も聲を上わつと斗と取亂せば、遺勇氣の光秀も親の慈悲心子故の閻輪廻の縊としめ付けられたへ兼てはら

雨が涙の沙境浪立ち騒ぐ如くなり、又も聞ゆる人馬の物音、矢叫
びの聲喧く手々取、如く聞ゆれば、光秀聞よりつゝ立上り^詞物音の敵か
味方か、勝利いかよと庭先のすね木の松が枝踏しめくよぢ登り、眼下
の村手を屹度見下し^詞和田の御崎の弓手より退^てつゝ數多の兵船、間
近く立たる魚鱗の備へ、千生瓢^{あらひさこ}の馬印^{うながひ}、疑もなき真柴久吉、風をくらつ
て此家を遅延、手勢引ぐし光秀を討取術^てと覺へたりと、いふより早くひ
らりと飛^お下り、草履^{ぞうり}掴みの猿面冠者^{さるわんじや}、いで一ひしぎと身繕^{みのり}ひ、勢ひ込でか
け出せば^ア、武智光秀暫く待、真柴筑前守久吉對面せんと呼ひつて、三
衣^みよか^アる陣羽織、小手脚當^{すね}も優美の骨柄ゆうせんとして立出れば、光
秀見るより仰天し、かけ戻つてはつたとよらみ^ア珍らし^ア、真柴久吉、武
智十兵衛光秀が、此世の引導渡してくれん、觀念せよと、諧寄る光秀、中を
隔つる老鳥の子故^ア手疵屈せぬ老女、なふ久吉様^詞我子よか^アる此母も、

天命遁れぬ引そぎ鎗作りし罪の万分一亡ふる事も有ふかと、思ひ餘つた此最期、武智が母さかはづかへ逆磔さかはづかよ、かつて無慚の死を遂とげしと、末世の記錄よ残してたべ、それもやつぱり恥めが可愛さ故の罪亡さんし、うるさの婆婆じゅばよ残らんより、孫といつしよみ死出三途さん、ナわたしもお供致さなはしまする、いづれもさらば、おさらばと、未練残さぬ武士の花も實も有る此世の別れ、今ぞはかなく成なけり、探みはの前も初菊もさらよ詞も出バこそ、あへ亡骸むなばを抑動おどかし天あく、あこがれ地ぢよ伏て歎く、心ぞいぢらしき哀を餘所よしょよ眞柴久吉、光秀みつひでよ打向うちむかひ俱ともよ天あを戴いたかぬ亡君むかの吊つひ軍、今此所で討取うめてい義有て勇を失ふ道理諸國の武士士よ久吉が軍功ぐんこうをしらさん爲時日を移さず山崎さんざきよて、勝負の雌雄しゆうを決すべしやいか、よく、遠の久吉よくいふたり、我われも惟任將軍ただにと勅許ちよくきよを請し身の本懷くわい、一先都せんとよ立歸り京洛中の者共へ、地子ぢしを敷すも母への追善互の運うんへ天王山洞はらが峠とうげよ陣所じんしょを構かまへ、只ただ一

戰よかけ崩さん、首を洗つて觀念せよ。何さく、たゞへ項羽が勇有
共我又孫吳が秘術をふるひ千變萬化よかけ惱まし勝鬪上るゝ瞬く内
と久吉が詞ひゆるがぬ大磐石忽廻り小栗樺の土よ哀を殘すといしら
すしられぬ敵味方、よらみ別るゝ二人の勇者、二世をかための別れの涙
かゝれとてしもう。バ玉の其黒髪をあへなくも切拂ふたる尼が崎ぼだ
いの種と夕顔の軒よきらめく千生瓢箪駒の嘶迎ひの軍卒見渡す冲
中國より退々入來る數万の兵船、威風りんくりんせんたる眞柴が武
名假名書ようつす繪本の太功記と末の世までも残しけり

○同十一日の段

家來共やい彌明日ハ山崎みて曠軍時よ拔目ない久吉殿敵方の間者
又怪しき曲者も有んかと此赤山與三兵衛へ密々の申付け汝らもぬか
りなく若や怪しき者も有らば男女よ限らずからめ取つて本陣へさし

出せよ、褒美の急度後日又沙汰、必ずぬかるな合點かと示し合せて主従へ、左右へこそ別れ行、身の世を忍ぶ、蓑笠もやつす姿も棚が、夫の詞守り立てし、主君の種の音毒丸いたなり傳き参らせて心ならずも夜の道流れ、傳ふ淀堤並木のかげ、立ち休らひ、和子遙の西より旗の手の月と映じてさらめく、山崎の御本陣、父上の御座所、わらひが夫政道殿も主君の御供、翌早々光秀様と對面、お嬉しうござりますかへ、嬉しい、早ふおどり様と逢いたいけれど、ふやらねむたいくと、詞の内、ふらく、眠り、道理でござります、太切の密事を受けた俄の族立、若や歟の間者と出合、身の御難義有りもやせんと、心に千と誰有ふ、江州丹州兩國のほ主今で、四海のほ大將、惣任將軍のほ公達、あまたの従者引かへて従ふ者と此柵杖柱とも思し召、心根がよいとほしい、是といふのも父上の道と背きし企、たとへ望み叶ふても、勿体ない

主君の春長様よ刃を合ひし、主殺しの大罪と世の口の端^は情ない夫
連れたる我夫も俱^{とも}汚名を下すかと思へば悲しいくと人目なけ
れば聲上げて、わつと斗^{たたか}ふ伏沈む心ぞ思ひやられたり立戻りたる赤山
が夫^{おとこ}と見^{みる}相圖^{あひ}の呼子^{よぶこ}友呼千鳥はらくと顯^{あらわ}れ出し以前の組子^{くみこ}女
めやらぬと追取^{おさとり}卷く驚きながら道の柵^さ音毒^{おとど}を圍ふてすつくと立ち^{たま}
心得^{ごんじ}ぬ人の^{ひと}の舉動^{うどう}何者成るぞと咎^{とが}むれば、赤山^{あかやま}の大口明き^{おほのくち}何者^{なん}ぞ
舌長し主殺しの光秀が一子^{おとこ}音壽丸^{おとじゅまる}軍の幸^{さい}先久吉公へ差出す、早く渡せ
とのもしつたり、事^{こと}おかしや、光秀公の内みて、人^{ひと}も知つたる松田
太郎左衛門が女房柵^{めいぼう}主なしの久吉殿、夫れ^{ふれ}も隨ふそち達が、及ばぬ事を
と言はせも立てず^{たてず}者共と赤山が下知^{しらし}と從ひ一度^{いちど}と切てかゝるを事
ともせず、右と左りよなぎ立つれば、口程^{くぢゆ}もなき雜人原むらくばつ
と逃散^{とうさん}つたり、透^すを窺ひ後ろより、切込む赤山早足の柵^さ、ひらりとかひせ

バ赤山が首は前まへと落おちとけり、此隙このあいだと音壽様、此場を早はやくと、かい
ト敷ひらく忠義ちゆうぎ一途いつよの女氣めうきと、主君しゆきみの若わかなを伴ともひて、定めなくなく、短夜たんやと、心せ
かれて、たどり行ゆ

○同十二日のだん

誰だを乞こ、鳴なや梢こずと、から衣きぬほつてふ蟬せんの音おとを友ともと、世よをいとふたる浪人なつうじんの
風雅ふうがを好むすきむ一かまへ、谷たにの流れも水無月みづなづきの空半うつぶなる夕暮ゆふぐれ時遠寺ときとおでらの鐘かね
かうくかうくと、兼ての願ねがひ有あり磯海いそ、深ふかき思おもひと棚たなが縁えんよるべの舅おじの住す家いえそこ爰こゑとたどりくるく、長暇ながひ稚子ちご連つづて夜よの道みち漸よる尋ねあたりと、も家いえ
居ゐなけれない爰こゑならんと柴しばの軒端のきばと、行ゆみて、いのふ音壽おとず様さま、夫おとこ松田太郎まつだたろう左
衛門殿ざゑもんどのの差圖さとを請うけて來事らいじは來くわても、つるつると是ぜ迄まで音信おとしおともせぬ親おやぢの所ところと
ふやら敷居ひらが高たかくなり、閃はくう思おもひますと、いへば音壽おとずが打うち黙頭まくとう、そな
たが得だ閃はらずばあれから先まへへ閃はつてやらふと何なんのぐわんせせも上あり口くち、

ミシヤシを志ほよして、閃る物音何やらんと、納戸を出る妻の眞弓、顔見合して柵が手をもちくと、ほんと私とした事が、いかよ舅君の所ぢや迎案内なしと不作法千万、お赦なされて下さりませと、いへどこのたれ不審顔^{しん}_相夜^よ入て若い女中の子供をつれ、舅の所へ來たとい、此母の覺へいござらぬ、成程^く委細^{わざい}の譯をナサねば、そう思し召も理^{ことわり}りながら、私事ハ十三の時家出致されました、^ほ子息宗太郎殿の女房柵とナ者夫も今れつきとした侍名も改て松田太郎左衛門とナまして夫れり^{あつされ}、^く遁^{あつされ}の武士とふぞ是迄の事ハ川へ流し、元の親子^よ、そりや云しやれいでも知れた事、元より氣^きよ違ふて家出したと云ふでもなし、生れ付て力強^{づよ}草深い住居^{すまゐ}を嫌ひ、我と我手^て家出した宗太郎、わしに明暮^こがれて居ます、そして連てわせたハ夫婦の中^よ出來た子か、マ^カくこちへと嫁しさの子^よ目のない母親が、悦ぶ中^よ宗左衛門、刀片手^てあゆみ出、

お祖母何をべりく　おいやるぞ親を見捨て不孝の躬夫よ連添ふ此女
郎嫁なんぞとハ穢けがらんしい早立ち歸れとつかふどよ、いふをおさへて、
ア、ヨシ夫ハ一途な思ひやう毎日く　壁訴訟かべそそう願ひの折も幸と初めに逢た
嫁の手前とふぞ了簡せきかんし中直りして下されといふも涙の種ならんたま、又
玄てもく役立ぬ悴が訴訟そそう開きたくないぞよい年をして女房去る
も世間の笑ひ暇の代りぢや向後物の言んずく早く奥へお行きやれと、
常の氣質きしつのぢやかごよ、詞ことばのなくて玄ほくと心殘して立て入柵いりさ
氣の毒どくの中よ願ひも言ひ兼て俄にわかよ作る輕薄笑ひけいはくわらわ、渋んしづんよまあよし
ない事からぬ夫婦のふいさかいもふお腹立はらだつの重うのに尤じやがどふ
ぞ夫の願ひ則此子の主人と仰ぐ光秀公の公達音壽丸様夫よ付ての
訴訟さうと何か様子の白紙しらがみよ書き認めし願ひの一書、舅の前よさし置け
バ遠骨肉同胞とおねぎゆどうぼうの我子の手跡しゆせきと玄ふくながら手よ取り上げて押開け

べ様子いかゞと氣遣ふ嫁、舅の猶も眉をひそめつゞく
讀も口の中、卷納めてよつと笑ひ、何事ならんと思ひしゝ、少し計りに侍くさい所も有り出かすく、そんなら夫のお願ひどやます、成程太切の密事、其方へ走るまいゝ、悴が我への願ひといふゝ、此小兒、光秀此度當山崎よふゐて、合戦のいどむといへ共無名の軍、元より主殺しといふ大罪、天何ぞ是を赦さん然らば十が九つ負軍と押はかつたる悴太郎、去るよよつて、光秀が一子音壽丸我よ養育を頼み、成長の後へ出家ともなしけれよとの願ひ書又柵事へ敵がた森尾茂助が妹よひへば是も親が手を返し遣はしくれよと有悴が文面と聞いて恂り柵の膝摺寄て、^て主君の若殿お預けやすん其爲よお諂の使ひ一つにわたらしが身の上兄様へ返してくれとい何の事、そふいふ事とい露えらず舅の様へお諂して、嫁よどふせい斯せいのふ詞受て歸りなば、夫の悦び此身の手柄^{がら}と悦んでゐる物

を科もない身を去らふとい聞へぬ夫の心やとくどき歎くぞ道理也。ハテ
扱何も歎くよや及ばぬ此宗左衛門も元い武士、亂れたる世を遁れ、心を
澄す茶道の樂しみ、折より久吉殿の招きよ預り咄しの伽弓も引きかた
眞柴へ心通はす某大惡無道の光秀が種と有べ願ふてもないよき得物。
首打放し久吉公へ獻するならば嘸悦びハテ飛で火よ入夏の虫といは是な
らんと、舅の一言柵が聞どり又も二度惄りほんよく親子とて餘りな
情玄らず獵人さへ懷へ入る鳥の助ける物たゞへ此身の去られても、夫
々立る心の潔白女でこそ有松田が女房、主人の若殿めつたよお首ハ得
渡さぬ、斯いふ内よ片時も置きます事の成りませぬ、ナ若殿様、いざゝせ
給へと立寄るを、突退けく音壽丸小脇よ引抱きはつたとよらみ、ナ龍
の腮よかしりし小悴、連歸らんとい叶ひぬ事、わるく妨げひろぐやいな
や、身の爲みならぬがやう、元々夫よ去られし此身、生て詮なき我命、ちつ

共厭くさへぬくと、又立かしるを面倒おもひなど立んの當うんど倒たおるし其隙
又奥の間さしてかけ入つたり、跡あとより一人柵さが苦痛くづこたへておき直り
チア、胴欲ともよともむごい共何なにと譬たとへん舅君、何辨わけへも七つ子の首くびを敵あだみ渡
さふどど心こころの鬼か蛇へびかいのふ、たゞへ此身このみひししくほほ成なる迎むか、取
かへささいで置おきべきかと、心こころを配そなへる様先さきよ、落ちる一書しょの夫めの手跡てしき柵殿さへ
光高こうこう、最前さきのみの中なか封むすじ込こたる此一書心こころならずと封押切しゆきせき、書残しゆざす
一書しょの事こと、やくそんなら夫太郎左衛門殿めへ討死うめしの覺悟かくごで有あつたか、タ何
よりもせよと又取上げなく今度の合戦主君光秀公主殺ひししといふ悪名、其
罪つみ遁のぶるし事有あるまじく覺うへひ故其方そのを頼たのみ親人おやじんへ若殿わの義ぎくれく
相頼たのむ事ことよし、又また明朝あさひの戰たたかひよ向むかひひ敵あだのそちが兄森尾茂助春久はるひさよ
しよし、元より討死うめしの覺悟かくごよしへば、我等われらが首くびは春久はるひへ遣おとひしし、なれ共
妹めいの縁えんよつれ、用捨もちもひひ、武門ぶもんの中なか耻はずべき事ことよしへば是非ぜいなく暇ひま

れしひ段、必ず恨有るまじくしと、讀もおへらす立上り、こりや斯して
居られぬわいのふ、夫の最期さいごに此曉、若殿の身の上奥へ踏込取返さふ
かく、あれく、あの鐘かね八つの鐘、天王山へ一里の餘、夫の命も助け
たしこりや、とふせうく、と主と夫の身の上を我身一人よ柵さくか立た
り居たり詮方ことほも涙ながらよ氣を取直し、何よもせよ是より直よ天王山
へかけ付けて夫よ一言そふじやく、と帶引しめ、常よ弱よわき女氣も夫
よ立る貞心じんのくもらぬ鏡てる月よ、照す道筋みち一さんよこけつまろびつ、
「玄たひ行山ゆきの血汐けつきのから紅べにひ、敵も味方も入亂れ、戰ひいどむ其中に、森
尾松田が雌雄めうの争あらそひ、人ませもせすはつしく、切結くわくびたる電光でんこうの、刃の
光り飛鳥ひのとりのごとく鎧よを削る其折ほりしも、夫の生死いかゞと、氣きはり弓
の女房柵武家の育いくいド、歎、夫を思ふ一心よ、木の根岩角厭くわいひな、
登る、嶮岨けんじゅも力草、足踏しめて難なくも、こなたの岡おかよぢ登り夫と見

よ分け入て、マアく待ても身を惜まず、さしゆる女房突きのけて、猶も付け
入る太郎左衛門、互いに劣らぬ勇將猛將中よりろく詮方もなぎさの
小舟柵が浪よ漂ふ其風情、心も功も有合楯切結びたる白刃の玄づ、玄つ
かどどりめ、マアく待て下さんせ、ヨレ兄様茂介殿必ず早まつて下さんすな
元より知た敵味方、討ちうたるゝへ武士の身の、常とい知て居ますれど
相手も多いゝ姫同士、切つはつしの争ひを、何と見捨てし置れふぞ思ひ
とまつてくと歎きかこつを耳よもかけず、ヤア義晴何を猶豫内證の縁
ハ縁親子兄弟敵と鏑を削るハ武門の常早く勝負を決せよと云せも
果すよつと笑ひ、死人同前の政道我相手よハ不足なり、光秀が先途を見
届け死る共遲かるまじ、妹がどむるを幸、此場を早く退けと聞よりくわ
つとせき立、ヤア奇^ア怪なる一言、弓矢取てハ誰よ恥べき事や有らん、女房が
兄とい云さぬ、首討取て修羅の奴となしきれんよ、死人同前とい案外な

りと居尺高たけ、いかやうゝ陳するとも死色しきを顯あらわす汝か骨格かく、我わ々討れ
ん心の覺悟かくご、死人と云しか誤りかと明察違めいさつたがへぬ一言ひとこと、胸むね又磐石ばんじゆ現あらわとも、
心こころのやみの柵さが、聲も涙なみだもかきくもり、兄様おにさまのあ之心ならどの様ようと思おもひ
えやんしても所詮死れぬ前まへの命みこと、とふぞ死なずまへ濟すくむ事ことなら、千年も
萬年も長生して、二人の中なかの、サア二人が中なか預かつた、主人のお種音壽しゆおんじゅ様よう
の行末ゆきも、ゆき無事むじな様よう思案おもはらして下くださりませよ、夫婦ふうふと成なて以來じこかた、願
ひといふいふは、是ぜ一つ聞届きしるべけてたゞ我夫がふと、妹めいか歎かなきさうが、さうがも血脉ちやくの糸いとの亂
れ口くち、涙吞の込む義晴よしはるが心こころの内うちぞせつなけれ何思なにひけん太郎左衛門たろうざゑもん、鎧よろい
ぎ捨すとつかと座すわし、實じつや名將めいしょうの下げ、弱じやく兵へなしと、通眼力つうがんりょく森尾義晴もりおよしはる、主家しゆけの
無道むどうを見限み限りて、死出三途しじゆさんとの先陣せんぢんと覺悟極かくごきよくめし心こころの鐵石てつせき死後しがとう又頼よむ
此女このじょ、又是迄おとづれ音信おとづれせざれ共とも實父じつふ松田利休殿まつだりきへ、預置よそたる彼若殿かれわたくし心こころを添そそて
よき様よう、頼よみ置おきへ貴殿きだん一人ひとり、最早浮世うきよ望のぞなし急いそぎ首くび討う我存心まへ立たさし

もらはるゝも武士の情猶豫は返つて恨むぞと言より早く持たる刀腹おもてが
ばと突立れば、のふ悲しやど取組つか組り、歎く女房を取て引すへサア森尾、名も
なき士卒の手よかけんより、武士の情よ我首を受取くれよとさし付れ
ば、世の有様とへ言ながら、かばかり惜き弓取も、主家の惡事おごとへ其身の
不幸、殘念至極と義晴が是非も涙なみだよ立迫れば、ヤア愚ぐうく、死よのぞむゆく勇いさぎ
者の本義かほね、骸からは廣野こうのよさらす共、名なひ千歳せんざいよととまるこそ、死しての悦び
此上なし早くまことにと唱名うたなの聲は此世の別れかと、身をもむ妻めぐわを動かさ
ず、膝ひざよ引數強氣がうきの手負、義晴いざと潔きよき、勇者ゆうしゃの最期さいごあへなくも首くびの前
みぞ落おちよけりわつと計りよ柵さく、其儘死ままでがいよいだき付聲つけこゑも惜惜まず泣
叫さけふ、心こころを察さとし諸袖もろそでをしづるも血脉ちば恩愛おんあいの涙なみだよかへりなかりける、義晴
の涙なみだを拂ぬぐひタマく妹めい歎なげひて返らぬ松田が最期さいご遺言ゆいごん守まつる音壽おとじが身みの上
又此首このの持歸もどり佛事ぶつこともよきよと詞ことの中なか、麓ふもとの方ほうよゑいく聲こゑ、ひ

きなびける兩陣の、入亂れたる鬨の聲身みぞこたゆる柵が涙ながらみ
亡夫の、ゑるしの筐上帶かぶせ、包むも涙雨やさめ、ふり行末の未迄も思ひ、つ
ゞけし歎味方、兄の忠臣妹が、貞心くもり泣こも麓の方へ「たどり行、短夜
の、風吹拂ふ庭の面隈なき月も哀そへ、涙の露かいたいけよ、無漸なるか
や稚子の、目め泣はらし、袖摺そりの、其松が枝えだ、からまるし、妻の眞弓まゆきにさし
寄て、アリ利休殿尤武智、光秀といふ逆賊ぎやくざきの子ことい云ながら、我子の爲ために
お主の若殿、手てみかけふとは胴欲どうよくなどふぞお命助ける様、思案仕かへて
下さりませといへ共、更またよこたへなく、おのが好める薄茶の手前、稚子わらわ
座をしめて、おりや侍の子こがよつて何なんともない、早ふ殺して下され
と、云放したる健氣けあげさを、聞きえ眞弓まゆきいたへ兼て、遠とほの武士の育そだてがら聞分
けよい程なを不便な、いぢらしううござらぬか敵と味方と分登る道

どうぞ命を助めやう、思案してたゞ我夫と、詞を盡し理をせめて涙ながら泣詫る山手の修羅の貴賤時しも遙々御して、松田太郎左衛門政道を森尾義晴討取たりと、聞く思へずつゝと立。梓宗太郎の早討死を遂しとか此上へ生け置て詮なき音壽、此世の暇取せんと、ほどくいましめ悦んで手そしぶりする有様を見るよ心へ弱れ共、四海の怨敵根を断ちて枯す枝葉と拔放すのもいたひしやとさしゆる真弓、寄るを寄せじと引戻し争ふ折も柵が脊よ夫の切首を結ぶ妹脊の別れ道脛もあらひよかけ戻り、此体見るよ稚子を後よ圍ひマ待てと、言せも立てず聲荒らげ、ア此期又及び聞く事ない、悴討死せし上へ天王山を取切られ、光秀が敗軍も目下妨げせずと、そこ退けと、尖き刀振りかざす、其手よ取付き聲震はいし、コレ親父殿慈悲も情も辨へながら初て逢た嫁の思へく、生としける、身でいなし、先立老木若木の誓つけどふぞ助けて進せてと、涙よ誠姑が情

の詞身又あまり有がた涙柵が、夫の首を抱き上げ、なき我夫も諸共又命
のお詫とさし付られ、道剛氣の利休も、親子の輪廻又引されて、たるむ心
を取直し、亥りくと付廻す、地獄の阿嘆三惡道、シャ面倒など突退蹴退、
エイと一聲稚首水もたまらず打落せば、二人のわつと泣倒れ正体もなく
伏沈む、主殺しの大罪報ひも早き此死ざまい、久吉の本陣へと、かけ出
す裾をとゝむる嫁はつたと蹴飛しかけ行向ふへあまたの軍卒、高挑灯
よ威風をてらし、亥づく入り来る眞柴久吉、あたり輝く陣裝束、思ひ寄
らねば宗左衛門遙しだつて平伏し、存じ寄らざる公の入來只今陣
所へ推參の所願ふてもなき對顔と、敵ひ深く相述れば、久吉莞爾と打笑
て、逆賊光秀が一子音毒丸足下扶助致さる由、家臣森尾が密事の注進、急
ぎ討手とも餘り仰々數久吉密々向ふたり、いかゆくと嚴然たる、詞
又猶も恐れ入、計らず手又入る武智が船討取たる某が信義を忘れ

改兼ての交り、^{イサ}後改下さるべしと、血汐を清めさし出せば、久吉とつく
と實檢有り、父光秀も此如く、やがて討取主君の怨敵、とは云ふ物の稚き
者、不便の最期遂たるよな^{イヤ}宗左衛門、云バ小兒^{ハチ}の此切首、梶木^{カシキ}みさら
すよも及ぶまじ、由縁の方へ葬り召され、邊への恩賞は、風雅を好める
別業へ思ひ寄つたるす志の一品、それく^ク者共早是へど、仰の下より雜兵
共、庭^{コト}みどつさり一つの居石^{ケン}、何^タ宗左見られしか、亡^{ビシム}君春長公の^{ハシマツ}自服
とも思されて、お請有らば拙者^{スリヤ}が悦び、其石を某へ、いかにも小袖かは
りの小袖石^{アヤマ}菖蒲^{スダチ}よりも、あらぬ眞孤^{マハラ}を引かけし、かりの淀^{ハシマツ}の^{ハシマツ}忘られぬか
な^{ハシマツ}、さらば^{ハシマツ}と一禮し、從者引連れ久吉^{ハシマツ}へ本陣^{ハシマツ}として歸らるゝ、跡見
送つて宗左衛門^{ハシマツ}はつと吐息も突詰し女心の柵^{ハシマツ}は何思ひけん表の方欠
出す戸口立て切利休^{ヤレ}待て女、音壽丸^{ハシマツ}が身代りよ二人が中の船を殺し、
夫^{ハシマツ}が最期の忠義も立、嘸本望で有ふなど、聞て悔り^{ハシマツ}そんなら此子を初

から、あなたの孫といふ事を、十六年が其間、對面せざる我躬、たゞへ幾年經る迄も、骨肉分けし此親が、見忘れてよい物か、音壽丸も出立せ、連來りし稚子の、面ざし目元鼻筋迄、悴々其儘生寫し、其時孫とは、知たるぞや、とい言ながら、現在の祖父が手々かけ一刀の下、き消行不便さを、こらゆる心の四苦、八苦、コリヤ推量せよと大聲上げ、取亂したる溜涙、ねふれるごとき死首を、右と左り又打守り、コリヤ悴久トキよてよく來たなア十六年が夢の内、忠孝全き親子が最期テ、出かしおつたと一言が、夫子の爲の經陀羅尼と、有がた涙棚が、袖々露置くかこち言、そうしたあなたのお心と玄らで恨みじ不孝カハの罪、お赦しなされて下さりませテ、其詫言は此母が、言ねばならぬ此場の時宜、孫と我子の死るのを、夫と白髮シラガの身の因果、むごい者玄やとさせしんでたるものなやいのと姑が、詫るも涙聞く涙テ、勿体ない事あつしやつて下さりますな、嫁と名計是迄もお宮仕へもする事か、道様

事を見せまする、不孝の罪が恐ろしいといふ物のあぢきない、二世と
契りし我夫の、最期の場所と居ながらもとめる事さへ情ない、いとし可
愛の千石迄人も多いと祖父様の、お手とかけふと親の身で連て來事へ
何事ぞと歎けべ、遠利休も、恩愛死別のうき涙二つの首を見つ見せつ、取
り亂したる三人が涙の雨と水かさのいと増りて淀川の堤も崩るし
ごとくなり、利休漸涙をふさへ、悴が忠義を立てさせんと信義を失ふ我
計ひ、天地を見抜く久吉殺、賜も有べきと、小袖とかへて遣はずと心得ぬ
庭の居石、其上猶も不審なると、金葉集と乗せられし相摸が詠歌、菖蒲と
も、あらぬ眞誠を引かけしと、引きぞ煩ふ頼政が深意を取れば千石が、最
期を花とよそへし謎、躬が子袖千石と、心を込めし我への賜、今こそ思ひ
當つたりと悟るも、遅久吉の、名智を感じる計なり、柵は膝すり寄り身が
なりといふ事を、そんなら孫の千石が、身代りと立たのち、水の泡となり

ますかいのふ、愚く、敵を惠む寛仁大度猶も願ひを立んと思へば、此利休が皺腹一つ、必ず留など指添を、既に抜んどする所、取付き歎きとむる二人、放せくと争ひの折もこそ有れ一間り、松田宗左衛門利休殿狼狽ての犬死なるか早まられなと聲をかけ、障子をさつと眞柴久吉立づくと立出れば、思ひ寄らねど騒がぬ利休、犬死とい事おかしや、誠眞の失せし某が既に報ふ此切腹、遠い老体斯も有んと察せし故、陣所へ歸る体み見せ、とくお忍び覗ひ聞く西國の探題たる眞柴久吉、實檢遂し光秀が一子、天地廣しといへ共今一人と有るべきか主君を弑せし武智光秀、夫又引かへ子息政道討死、遂しは遁勇者、せめて死したる人の菩提の爲め、此所へ庵を結び利休殿好める道の茶を以て、往來の人々施さば死ぬるよ増さる節義ならんと情の一句は則悟道、死をどうよりて松田利休、惠も厚き御仰教への心は則菩提心の濁り墨染の

衣がハケハコレ此居士衣、くもりを拂ふ誓ひぞと誓ふつゝと押し切て、姿
心もかへる世ヌ我ハ茶道の道廣く、孫が其名の一字を取利休を其儘ム
干の利休と改名し、浮世の塵ム交へる共只本覺の佛性たらん。天性
備ハル千の利休、今ヨリ久吉が則ち茶道の師と頼まんと、約束堅き小袖
石庭ム哀ハ稚子の涙の種か袖すり松古跡となりて末の代ム残る其名
の因縁ハ、此時よりとしられたり、かゝる折しも眞柴の郎等、庭上ム大息
つき、注進と呼ハレバ、堀本義太夫、味方の勝利ハ何とく、^ア仰の如
く備を立、兩陣互々鎧を削り、爰をせんぞ、戰ふ中、敵の勇將蟹江才藏、陣
頭ム踊り出。味方の諸軍を手玉の如く打付け、投付け欠廻る、其勢ひよむ
ち恐れ、少したゆみて見へたる所、福嶋の陣中より至て小兵の桂市兵衛
斯と見るる飛かしり、互々組合金剛力者、六尺ゆたかの才藏を難なく生
捕古今の手柄、勝色見する間もなく、川を隔し筒井順慶、時分ハよしと光

秀が陣所を目がけて無ニ無三、一手又成て責かくれば、敵ハ廢忙狼狽騒
ぎ、崩れ立たる其虛又乗て、退立はつ詰責付れば、是迄也と光秀も馬を飛
して只一騎、小栗樺^{おぐら}として落延しを退^のかけ行味方の勝利、^に歸陣有て
然るべしと、悦び勇み訴ふれば^國、潔しく、^{イサ}小栗樺へ後詰せん、旁用意
と久吉の、詞又はつと迎ひの軍兵いざ^に歸陣と引居る、駒又ゆらりと法
の縁結^{ゆづき}、^ノ一世と二世の縁切て捨たる亡魂^{おちたま}の、あるしを直^す、野邊送り、又
思ひ出す、女氣又涙の袖や鎧の袖、旭又映^{あさひ}^{ゑい}じきら^{きら}く、^き綺羅一天^{かすみ}又薺取
る真柴、仁徳なりや風雅の徳、忠孝全き其徳を世^よ々傳^ひて美嘆せり

● 同十三日の段

神力勇者^{ゆうしゃ}又勝すといへ共、天遂^{すい}又是^ぜを罰す、されば武智十兵衛光秀筒井
順慶^{じゅんけい}裏切^{うらき}よつて山崎の一戦敗れ、漸^{やがて}遁^おれ小栗樺^{おぐら}の藪陰近く^{やぶ}さしか
れば、追^おく欠くる真柴方^{おなわ}落人^{おちこ}よ遁^のすなどおめき叫んで切かれば^{シヤ}

ちよこ才なうづ虫共冥途の導きしてくれんと振かざしたる刀の稻妻
瞬く内み先手の軍兵十二三騎切て落せし勇猛力叶はぬ赦せど一同み
嵐よさそふ端武者共、むらくばつと逃失たり、相人なければ光秀ハ太
刀のいきりをさまさんと數の小かけよ手綱をひかへ傾く運の口惜涙、
鎧の袖よはらく、降からりたる夕立の空も哀や添ぬらん折ふし藪
のこなたよりゆみ不む光秀が鎧の透間を見極めて、ぐつと突込猪突鎧
驚きながら切拂ふ間もなく突出す竹鎧の穂先ハ風の乞の薄、なぎ立突
立切拂ひ暫し時をぞうつしける梢よすだく蟬の經手向となりし武智
光秀小手定まらぬ竹鎧を身の毛のごとく刺通され、流るゝ血渉よ夏草
を花と染なす紅ひの、田畠あせ道刀を杖、よろぼひよろぼふ無慚の有様、
ほつと一息撞出す鐘寂滅爲樂貴太鼓修羅の迎ひの百姓共、集り寄たる
一むら雀又突かしる上段下段、一世の瀬戸と受流し、爰をせんとし切ふ

せぐ、手練の鉢先百姓共叫ばぬ赦せと我先よ跡をも見ずして逃散たり、遁さじ物とかけ出し、心は矢猛とはやれ共身体勞れどつかと座し、拳貫く無念の歯がみ弱る心を取直し、一元よ歸す此世の暇刀逆手よ我腹へがばと突立引廻す程なく來たる眞柴久吉、万里よ羽うつ大鷗の威勢ひ旭の登るが如く、優々然と歩み寄い、かゝ光秀主を討たる天罰の報を思知たるかと、太刀拔放し光秀が首をはつしと打落し諸軍よ向ひ聲高く、
ア者共、此虛キヨ乗て敵の殘黨左馬助光俊、齋藤内藏助が備へを暫時モロヒ攻崩し、名よ近江路の湖へ一騎も残らず追沈めん旁來れど先よ立、勇進んで凱歌の聲、箭ミサガをたゞき凱陣の其悦びを今爰よ、うつすも勸善懲惡の端ハシともなれどまさか言書き納めたる君が代の方よ歳サハの毒コトコトは中よ
ヤもふろかなれ

寛政十一年未七月十二日作

明治廿三年十二月廿二日印刷

明治廿三年十二月廿二日出版

編輯兼
發行者

日本橋區通四丁目四番地
内藤加我

印刷者

日本橋區新和泉町一番地
瀧川三代太郎

發兌

日本橋區通四丁目四番地
櫻堂

